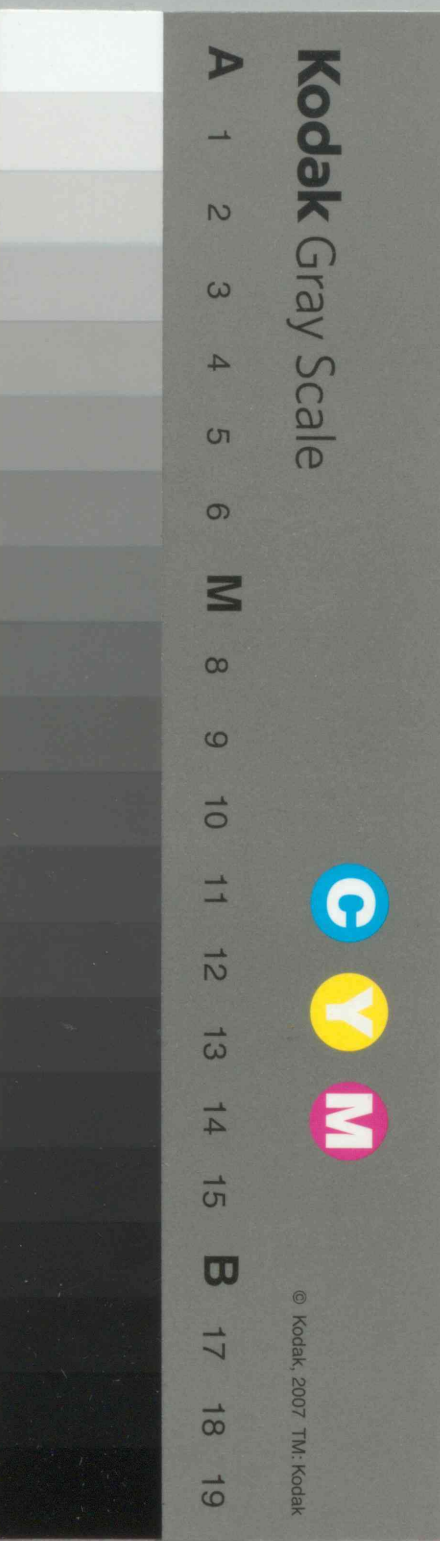
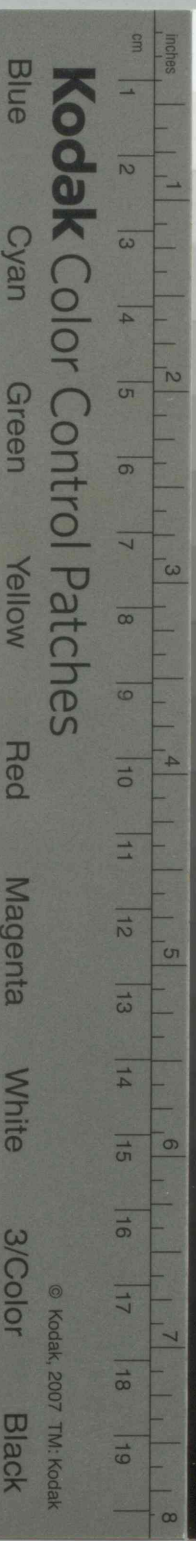
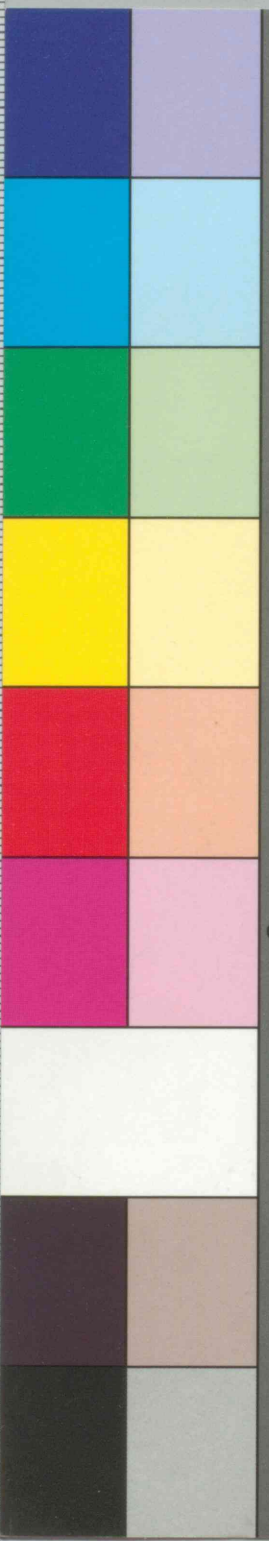


訂改
日本語法提要

全

375.9
K025
資料室



42581

教科書文庫

4
815
51-1912
20000 18012



S15.9
Koz5

大正元年十一月六日
文部省檢定濟
師範學校國語科用書

小山左文二著

改訂
日本語法提要

東京 松邑三松堂

白田書局
吉岡洋行
日本口語法精義
口語法
文部省檢定日本口語法



緒言

一本書は、師範學校の本科、豫科、教員講習科などに於ける日本語法の教科書、参考書、並に小學校教員檢定試験に應ずる人たちの参考書などに充てるために去る明治四十年に編述した日本語法提要进行を新に訂正して發行したものである。

一本書は、現今一般に世に認められて居る定論に基づいて日本語法の原則を解き明かすやうにとつとめた。従つて自分一己の臆説や妄斷は一切これを避けた。

一本書は、又現行はれて居る國定教科書の語法と精密に一致させた。そして小學校實地教授者の適切なる参考書になるやうにつとめた。

一本書は、又文法との聯絡に深く意を用ひて、その用語な

ども成るべく一般文法の用語に従った。そして徒らに讀者に惑を起させないやうにとつとめた。一本書は、又簡明直截を旨として、一度讀めばすぐに讀者に分るやうにとつとめた。従つて煩瑣に互る事柄やあまり必要でない語法などは、一切これを省いた。一本書は、又拙著日本文法提要と密接なる連絡を保たせた。それゆゑ、本書を繙かれる諸君は、日本文法提要をも併せ繙いて、互に比較對照しながら研究されたい。

大正元年九月

著者識す

訂改 日本語法提要目次

第一篇 語

第一章 總説	一
第一節 音	一
第二節 語	二
第三節 句 文 品 詞	二
第二章 名詞	三
第一節 名詞の意義	三
第二節 名詞の種類	三
第三章 代名詞	五
第一節 代名詞の意義	五
第二節 代名詞の種類	五
第四章 動詞	一三

第一節	動詞の意義	一三
第二節	動詞の活用	一四
第三節	動詞の段	二五
一、	四段活用	二五
二、	か行變格活用	二八
三、	さ行變格活用	二九
四、	上一段活用	三〇
五、	下一段活用	三二
第四節	動詞の自他	三四
第五節	動詞の音便	三七
第五章	形容詞	四一
第一節	形容詞の意義	四一
第二節	形容詞の活用	四一
第三節	形容詞の段	四三

第六章	助動詞	四七
第一節	助動詞の意義	四七
第二節	助動詞の種類活用及び動詞との 續き方	四七
一、	時の助動詞	四八
二、	打消の助動詞	五一
三、	推量の助動詞	五四
四、	受身の助動詞	五六
五、	可能の助動詞	五九
六、	使役の助動詞	六一
七、	尊敬の助動詞	六四
八、	指定の助動詞	六六
九、	希望の助動詞	七〇
第三節	助動詞と助動詞の續き方	七四

第七章 助詞……………七七

 第一節 助詞の意義……………七七

 第二節 助詞の種類及び用法……………七八

 一、體言に附く助詞……………七八

 二、種種の語に附く助詞……………八五

 三、用言に附く助詞……………九三

第八章 副詞……………一〇三

 第一節 副詞の意義……………一〇三

 第二節 副詞の用法……………一〇四

第九章 接續詞……………一〇八

 第一節 接續詞の意義……………一〇八

 第二節 接續詞の種類及び用法……………一〇八

第十章 感動詞……………一一三

 第一節 感動詞の意義……………一一三

第二節 感動詞の種類及び用法……………一一四

第十一章 語の構成……………一一六

 第一節 疊語法……………一一六

 第二節 熟語法……………一一八

 第三節 接頭語法……………一二二

 第四節 接尾語法……………一二三

第十二章 品詞の解剖……………一二四

第二篇 文

 第一章 文の成分……………一二六

 一、主語 説明語……………一二六

 二、客語……………一二七

 三、補足語……………一二七

 四、修飾語……………一二八

 第二章 成分の排列……………一三三

第三章	成分の省略	一三四
第四章	節	一三七
第一節	獨立節	一三七
第二節	名詞節	一三八
第三節	形容節	一三八
第四節	副詞節	一三九
第五節	説明語節	一四〇
第五章	文の種類	一四一
(甲)	構造上の種類	一四一
第一節	單文	一四一
第二節	複文	一四二
第三節	重文	一四三
(乙)	性質上の種類	一四四

第一節	敘述文	一四五
第二節	疑問文	一四六
第三節	命令文	一四七
第四節	感歎文	一四八

訂改
日本語法提要目次終

廣島大學
圖書印

訂改
日本語法提要

第一篇 語

第一章 總說

第一節 音

は ば
な ば
ひ び
す ぶ

音
右のはなうぐひすは、いづれも肺臓から出る空氣が、口内の諸機關に觸れて發する聲である。かやうな聲を指して音といふ。

第二節 語

單語

右のはな、とりは、いづれも、音が集まつて出来たもので、それぞれ特別の意味をあらはしてゐる。これらを指して語又は單語といふ。

第三節 句 文 品詞

さくら の はな。 きれいな とり。

右はいづれも、語が集まつて、やや込み入つた意味を表はして居る。かやうなものを句（連語）といふ。

はな が さく。 とり が とぶ。

文章

右はいづれも、語が集まつて、一つの完全な意味を表はして居る。かやうなものを文又は文章といふ。
句又は文を組み立てる語には、

種々の品詞
九品詞又十品詞
同イフ

100品名 品詞
名 (名詞)
かぞへ (形)
あつかひ (動)
ふりかへ

うた多物いし
單語ツイフ
おは入へん
おつていふ
名詞、動、名

本名大
作詞
用イフ
品詞
一名代
二物形
一物形 (國語別)

名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞
助詞 副詞 接續詞 感動詞

の九つの種類がある。これらの一つ一つを品詞といふ。我が國語はこの九品詞の結合によつて出来てゐるものである。今順にこれを述べよう。

第二章 名詞

第一節 名詞の意義

富士山 は、日本 の 名山 である。

耳 は 二つ、口 は 一つ。

右の富士山、日本、名山、耳、口は、事物の名をいふ語で、二つ、一つは、數量をいふ語である。かやうな語を名詞といふ。

第二節 名詞の種類

固有名詞

名詞を別けて、**固有名詞**、**普通名詞**の二つとする。固有名詞とは、特別な事物の名として用ひる名詞である。前例の富士山、日本をはじめ、大山元帥、日本海海戦、源氏物語、靖國神社など、皆これに屬する。

普通名詞

普通名詞とは、同種類の一切の事物にあてはまる名詞である。前例の名山、耳、口をはじめ、**國人**、**書物**、**戦争**、**神社**など、皆これに屬する。

右の外、名詞の一種に數量を表はすものがある。これを**數詞**といふ。前例の二つ、一つなど、廣く數を表はすものを始め、順序の數を表はす第一、第二など、或事物の數を表はす三羽(鳥の數)、五隻(軍艦の數)など、皆これに屬する。次の文の中の名詞を類別せよ。

練習

Handwritten notes and diagrams at the top of the page. Includes terms like '順序' (order), '數詞' (numeral), and '普通名詞' (common noun) with arrows pointing to the main text. A diagram shows '順序' branching into '第一' (first) and '第二' (second), and '數詞' branching into '三羽' (three wings) and '五隻' (five ships).

- 1、父母の恩は、山よりも高く、海よりもい。
- 2、西郷、木戸、大久保を維新の三傑といふ。
- 3、我が家は、これから三つめの小路を左へ折れて、三町ばかりいった處にある。

第三章 代名詞

第一節 代名詞の意義

私 は、あなた の 説 を 信 ず る。

おまへ、それ を ここ に 持 っ て 來 い。

あつち、こつち を たづね まはる。

右の私、あなた、おまへ、それ、ここ、あつち、こつち等は、名詞に代へて用ひる詞である。よつてこれを**代名詞**といふ。

第二節 代名詞の種類

代名詞は、これを人代名詞と指示代名詞とに大別する。

代名詞

Handwritten notes on the left side of the page, including '事柄' (matter), '代名詞' (pronoun), and '指示代名詞' (指示代名詞).

Handwritten notes at the top of the page, including '指示代名詞' (指示代名詞) and '第一' (first).

人代名詞

人代名詞とは、専ら人の名に代へて用ひる詞である。前例の私、あなた、おまへをはじめ、あのかた、どなたなど、皆これに屬する。

自稱 對稱 他稱 不定稱

人代名詞の中で、わたくし、わたし、われ、僕などは、自分の名に代へて用ひる語であるから、自稱といひ、あなた、君、おまへなどは、話しかける人即ち對手の名に代へて用ひる語であるから、對稱といふ。又これ、このかた、それ、そのかた、あれ、あのかたなどは、自分と對手との外の人、即ち話の中に引く人の名に代へて用ひる語であるから、他稱といひ、どなた、だれ、どれなどは、不定の人や、知らぬ人の名に代へて用ひる語であるから、不定稱といふ。

(注意) 君を對稱に、僕を自稱に用ひるのは、名詞を代名詞に轉用したので

自稱 對稱 他稱 不定稱

複數の人代名詞

ある。此の類は外にも多い。

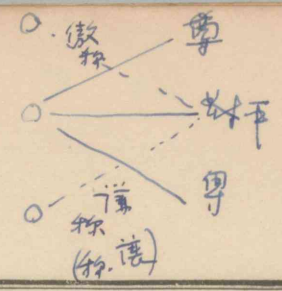
○われわれ、私ども、おれなど、君たち、おまへら、あの人、がたなどいへば指される人が二人以上あることを示す。これらを複數の人代名詞といふ。

○他稱の人代名詞の中で、このかた、これ、こいつなどは、自分に近い人を指すから、之を近稱といひ、そのかた、それ、そいつなどは、稍自分と離れた人を指すから、これを中稱といひ、あのかた、あれ、あいつなどは、更に自分と離れた人を指すから、これを遠稱といふ。

人代名詞は、同じ稱でも、身分の高下や關係の親疎などによつて、嚴格につかひわけねばならぬ。今そのあらましを次に述べよう。

自稱 わたくしは目上又は同輩に對して、いふ語で、わたしは同輩又は目下などに對して、いふ語、僕はただ同輩に對して、いふ語、われ、おれは目下に對して、いふ語であ

目下語特有
セ、デ、下



尊稱
平稱
卑稱

る。而して目上に對していふ語を尊稱といひ、同輩に對していふ語を平稱といひ、目下に對していふ語を卑稱といふ。

對稱 あなたは目上又は同輩に對していふ語(尊稱又は平稱)で、おまへは目下に對していふ語(卑稱)である。

右の外、尊稱の語に陛下、殿下、閣下、御前ゴゼンなどいふがある。又對手を輕しめ罵る語に、うぬ、きさま、おのれなどいふがある。

他稱 このかた、そのかた、あのかたなどは目上の人を指していふ語(尊稱)で、このひと、そのひと、あの一となどは同輩又は目下の人を指していふ語(平稱又は卑稱)、これ、それ、あれは目下の人を指していふ語(卑稱)である。

右の外、尊稱にこのおかた、そのおかた、あのおかたなどいふがある。又卑稱にこいつ、そいつ、あいつなどいふがある。

不定稱 どのかた、どなたなどは目上の人に對していふ語(尊稱)で、どのひと、だれなどは同輩又は目下の人に對していふ語(平稱又は卑稱)、どれは目下の人に對していふ語(卑稱)である。

右の外、尊稱にどのおかた、卑稱にどいつなどいふがある。

次に人代名詞の略表を掲げよう。

身分	尊稱	自稱	對稱	他稱	不定稱
	わたくし、	あなた、	あなた様、	このかた、 そのかた、 あのかた、	どのかた、 どなた、

指示代名詞

指示代名詞とは事物、場所、方角などの名に代へて用ひる語である。前第五頁に示せる例のそれ(事物)、ここ(場所)、あつち、こつち(方角)など、皆これに屬する。

平稱	あなた、 君、	このひと、 あのひと、	どのひと、 だれ、
卑稱	わたし、 われ、	おまへ、	それ、 あれ、
			だれ、 どれ、

事物代名詞

指示代名詞の中で、こ、これ、そ、それ、あれ、どれ、なにのやうに事物を指示するものを事物代名詞といひ、ここ、そこ、あそこ、あすこ、どこのやうに場所を指示するものを場所代名詞といひ、こちら、こつち、そちら、そつち、あちら、あつち、どちら、どつちのやうに方角を指示するものを方角代名詞といふ。これらの代名詞は、その指示する位置の遠近、定不

場所代名詞

方角代名詞

定などによつて、又次の四つに分ける。

近稱

近稱 此、これ(以上事物)、ここ(場所)、こちら、こつち(以上方角)の

やうに、自分の身に近い事物や場所や、方角などを指し示すもの。

中稱

中稱 そ、それ(以上事物)、そこ(場所)、そちら、そつち(以上方角)

のやうに、稍離れた事物や場所や、方角などを指し示すもの。

遠稱

遠稱 あ、あれ(以上事物)、あそこ、あすこ(以上場所)、あちら、あ

つち(以上方角)のやうに、自分の身よりずっと離れた事物や場所や、方角などを指し示すもの。

不定稱

不定稱 なに、どれ(以上事物)、どこ(場所)、どちら、どつち(以上

方角)のやうに、不定な事物を指し示すもの。

(注意) ○どれは選ぶ物事の不定な時に用ひ、なには、すべて物事の不定な時に用ひる。

○場所をぼんやりといふ時には、場所の代名詞の下にら又はいらをつけてここら、そこら、こいら、そいらなどいふ。

次に指示代名詞の略表を掲げよう。

種類	稱			
	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、	ど、どれ、 なに、
場所	こゝ、	そこ、	あそこ、 あそこ、	どこ、
方角	こちら、 こつち、	そちら、 そつち、	あちら、 あつち、	どちら、 どつち、

次の文の中の代名詞の種類、稱などを挙げよ

- 1 その山のあちらに見えるのは、何といふ山ですか。
- 2 おまへたちは、この後、決してあのやうな事をしてはならぬ。

練習

この
その
あの
どの
なに
こちら
こつち
そちら
そつち
あちら
あつち
どちら
どつち

動詞

3 螢 来い 来い、よい 水 のま しょ、こつち の 水 は う
まい、あつち の 水 は 苦い。
4 これ は ここ に、それ は そこ に、あれ は あそこ
に、その まま お置き なさい。
5 あのおかた は、大そう、あなた や わたくし の ため を
思つ て 下さい ます。

第四章 動詞

(働いて)

第一節 動詞の意義

鳥 が 啼く。 火 が 消える。
猫 が あそこ に 居る。

右の啼くは鳥の動作を表はし、消えるは火の有様を表はし、居るは猫の存在を表はして居る。かやうに、物事の動作、有様又は存在を表はす語を動詞といふ。

第二節 動詞の活用

前例の動詞の中で啼くは、

鳥が啼かぬ。鳥が啼き出す。
 鳥が啼く。鳥よ啼け。

語根 軒
 語尾
 活用

のやうに、啼か、啼き、啼く、啼けと語の形を變化する。さてこれらの語の中で、啼のやうに變化せぬ部分を語根といひ、か、き、く、けのやうに變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。

動詞の活用は、これを四段、か行變格、さ行變格、上一段、下一段の五種に別ける。今次にこれを概説しよう。

四段活用 讀むといふ動詞は、

(ま(あ段)本 を 讀まう。

文法 口尾
 四段 已變 四段
 上二 下二 上二
 下二 上二

下二 下二
 左變 左變
 加變 加變

讀み(い段)本 を 讀み 始める。
 讀む(う段)本 を 讀む。
 讀め(え段)本 を 讀め。

のやうに、五十音圖のあ、い、う、え、四段に活用する。このやうに活用する動詞をすべて四段活用の動詞といふ。

四段に活用する動詞はか、が、さ、た、な、は、ば、ま、ら、の九行である。次の表を見よ。

詞	動	段	四		
な	た	さ	が	か	行
行	行	行	行	行	語根
死	立	推	漕	書	
な	た	さ	が	か	語
に	ち	し	ぎ	き	
ぬ	つ	す	ぐ	く	尾
ね	て	せ	げ	け	

活用表			
は行	ば行	ま行	ら行
習	飛	讀	賣
は	ば	ま	ら
ひ	び	み	り
ふ	ぶ	む	る
へ	べ	め	れ

(注意) ○ 文語のな行變格活用の動詞死ぬ、往ぬ、及びら行變格活用の動詞有り、居りは、口語では全く通例の四段に活用する。但し、な行變格活用の動詞は、地方によっては、文語の如く、死ぬる人、往ぬる人、死ぬれば、往ぬればなどともいふ。

○ 買ふ、思ふ、問ふ、叶ふなどのやうにわ行四段活用らしく思はれる動詞は、皆は行四段活用である。

か行變格活用 來るといふ動詞は、

こ (お段) 春 が やがて こ よう。
 き (い段) 春 が き た。

か行變格活用

きたり
 きたり
 きたり

死ぬる往ぬる
 已説
 居り... 許容業
 こ... 四段活
 りり... らん

『來』くる(う段) 春 が くる。
 くれ(う段) 早く 春 が くれ ば よい。
 のやうに、五十音圖中のか行のおいの二段に活用し、更にう段の音に^レれが加はつて居る。このやうに活用する動詞をか行變格活用の動詞といふ。今その表を次に掲げよう。

行	語根	語	尾
か行	『來』	こ	き
		くる	くれ

(注意) ○ 『來』は語の全體を變化する動詞である。

○ 文語にはくといふ語尾があるが、口語にはない。

○ か行變格活用の動詞は、ただ來るといふ語ばかりである。

さ行變格活用 爲るといふ動詞は、

さ行變格活用

『爲』

せ	(え段)	悪い	事は	せぬ	がよい。
し	(い段)	悪い	事を	した。	
す	(う段)	悪い	事を	する。	
す	(う段)	悪い	事を	すれば、	人に

憎まれる。

のやうに、五十音圖中のさ行のえいの二段に活用して、更にう段の音にるれが加はつて居る。このやうに活用する動詞をさ行變格活用の動詞といふ。今その表を次に掲げよう。

行	語根	語	尾
さ行	『爲』	せ	し
		する	すれ

固有のさ行變格の動詞は、爲るの一語であるが、名詞又は

あつす、いふ、論ず、
論此、頃、或、是、ら

用上一段活

漢語にこの語が附いて動詞となつたものは誠に多い。罰する、論ずる、勉強するなどは、皆その例である。

(注意) ○文語にはおはすといふ語があるが、口語ではいはぬ。
○文語にはすといふ語尾があるが、口語にはない。
○するが、論ロや講カのやうに、一字の語で、撥ねる音の下や、引く音の下に來るときには論ロぜ、論ロじ、講カぜ、講カじのやうに、さ行の變格に活用する。
○名詞や漢語が動詞となるときは、大部分さ行變格に活用するが、中には譯す、愛すなどのやうに、さ行四段に活用するものもあり、察サしる、達タしるなどのやうに、さ行上一段に活用するものもあり、禁カじる、高カじるなどのやうに、さ行上一段に活用するものもある。

上一段活用 落ちるといふ動詞は、

ち	(い段)	木	から	落ち	た。
ち	(い段)	木	から	落ちる。	
ち	(い段)	木	から	落ちれば、	怪我をする。

のやうに、五十音圖の中のいの一いの一段に活用して、さらいにるれいの二音が加はつて居る。このやうに活用する動詞を上一段活用の動詞といふ。
 上上一段活用の動詞は、ああかかたただだななははばばままららわわの十一行に活用する。次の表を見よ。

上 一 段 動 詞 活						行	語根	語	尾
は	な	だ	た	が	か				
行	行	行	行	行	行	あ	射		
用	煮	閉	落	過	起				
ひ	に	ぢ	ち	ぎ	き	い			
ひる	にる	ぢる	ちる	ぎる	きる	いる			
ひれ	にれ	ぢれ	ちれ	ぎれ	きれ	いれ			

用 表

わ	ら	ま	ば
行	行	行	行
居	懲	見	伸
ゐ	り	み	び
ゐる	りる	みる	びる
ゐれ	りれ	みれ	びれ

(注意) ○ 文語の上二段活用は、口語では上上一段に活用する。
 ○ 文語のや行上二段の老老ゆゆ悔悔ゆゆ報報ゆゆなどは、老老いるる悔悔いるる報報いるるとなつて、あ行上上一段のいるると同じ形になる。よつて便宜上これをあ行の活用に移して、や行を省く。

○ 上上一段に活用する動詞の中で、假名遣のじじと紛れ易いのは、怖怖ぢるぢる、閉閉ぢるぢる、誣誣ぢるぢる、攀攀ぢるぢるなど、だ行に屬する語で、いいと紛れ易いのは、生生ひるひる、強強ひるひる、誣誣ひるひる、用用ひるひるなどは、行に屬する語である。
 ○ 用用ひるひるは慣用上、は行とわ行との兩行に活用する。

下 一 段 活 用

下 一 段 活 用

越越ええるといふ動詞は、
 (え) (え段) 峠 を 越越ええた。

越える(え段) 峠を越える。
 えれ(え段) 峠を越えれば、谷が見える。
 のやうに、五十音圖中のえの一段に活用して、更なるれの二音がそれに加はつて居る。このやうに活用する動詞を下一段活用の動詞といふ。
 下一段活用の動詞は、あかがさざただなはばまらわの十三行に活用する。次の例を見よ。

下 一 段					行	語根	語	尾
ざ行	さ行	が行	か行	あ行				
交	馳	告	蹴	得	行	語根		
ぜ	せ	げ	け	え		語		
ぜる	せる	げる	ける	える				
ぜれ	せれ	げれ	けれ	えれ				

動 詞 活 用 表						
た行	だ行	な行	は行	ば行	ま行	ら行
育	撫	尋	教	總	改	枯
て	て	ね	へ	べ	め	れ
てる	てる	ねる	へる	べる	める	れる
てれ	てれ	ねれ	へれ	べれ	めれ	れれ

(注意) ○文語の下二段活用は、口語では下一段に活用する。

○ざ行下一段に活用するのは、交ぜるだけである。

○文語のや行下二段活用の動詞は、口語ではあ行下一段活用と同じ形になる。よつて便宜上これをお行の活用になつて、や行を省く。

○あ行下一段活用で普通なもの、得る、甘える、癒える、覺える、聞える、消える、凍える、肥える、越える、榮える、互える、餒える、聳える、絶える、潰れる、煮える、生える、映える、冷える、殖える、吼える、まみえる、見える、悶える、燃

練習

える萌えるなどで、わ行下一段に活用するのは、植ゑる、餓ゑる、据ゑるの三語である。普通使用する動詞で上の二類と紛れ易いものは、おほかたは行下一段活用に属する。

○蹴るを四段に活用させて居る地方もある。

次の文の中の動詞を指摘して、一一その活用をいへ。

- 1 本を読み、字を書き、算盤をはじく。
 - 2 春は来たけれども、氷はまだ解けない。
 - 3 尺取蟲の屈むのは、伸びようがためである。
 - 4 大將を獲ようとするには、まづその馬を射るがよい。
 - 5 早く起き、遅く寝て、一心に家業を勉めたから、やがて家運を挽回した。
- 次の文の中に假名遣の間違があるなら直せ。
- 1 まかぬ種は生へぬ。
 - 2 鷹は飢へても穂はつまぬ。
 - 3 どうそお構ひ下さいますな。
 - 4 築山には常磐木を植ゑ、泉水には清水をたたへる。

5 過を悔ひ、輕舉を耻じて、絶へ入るばかりなげいた。

第三節 動詞の段

動詞の各變化は、それぞれ違つた意義を持つて居る。今便宜上普通文法の説き方に倣つて、各動詞が六段の變化をするものとして、各段の意味を次に説明しよう。

四段活用の動詞の六段變化は、次の通りである。(假に讀むじて論)

語根	語尾の段					
	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段
讀	ま	み	む	む	め	め

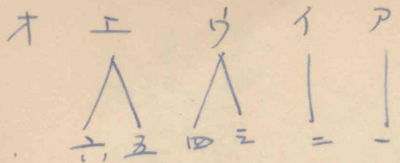
第一段讀まは、

これ から 新聞 を 讀ま ろう。

のやうに、多くうにつづいて未來即ち將然の意を示す。

一	二	三	四	五	六
す	た	終	序	じ	命

(四段活用)
(列)



四段活用の動詞の段

將然段

う 將然形
ぬ 體形 (吉岡博士)
未熟形 (新村博士)

依つて通常この段を將然段といふ。

この段の語にぬ、ないなどいふ打消の意味の語を加へれば、その動作を打ち消す意となる。

第二段讀みは、

新聞を讀み始めた。

この新聞は讀み悪い。

のやうに、多く用言(即ち動詞、形容詞)につづく。よつて此の段を通

連用段

連用形
中止形
名詞形
居者詞

常連用段といふ。

(注意)○此の段は、本を讀み、字を書くのやうに、中止即ち言ひさして他の語に移る場合にも用ひ、又讀みはよくわかったが、意味はわからぬの讀みのやうに、名詞にも轉用する。

第三段讀むは、

新聞を讀む。

終止段

のやうに、文章を言ひ止める場合に用ひる。よつて此の段を通常終止段といふ。

第四段讀むは、

新聞を讀む人。新聞を讀む彼等。

連體段

のやうに、體言(即ち名詞、代名詞)に續く。よつて此の段を通常連體段といふ。

第五段讀めは、

新聞を讀めば、見聞が廣くならう。

のやうに、或事件を假に定めていふ意に用ひる。よつて

此の段を通常假定段といふ。

(注意)○文語の第五段は已然確定の意で、口語とは意味が全く違ふ。

第六段讀めは、

假定形
(文) 已然形 (確定)

假定段

新聞 を 讀め。

命令段 のやうに、命令の意となる。よつて此の段を通常命令段といふ。

か行變格活用の動詞の段は次の通りである。

將然 こ(よう)……友だち が やがて こ よう。

(注意)○この段の動詞にぬないをつけてこぬこないとすれば、否定の意になる。

連用 き……友だち が、きはじめる。

(注意)○この段の動詞は、兄もき弟もくるのやうに、中止の形にもなり、又「往きき」のやうに、他の詞と熟して名詞の形にもなる。

終止 くる……友だち が くる。

連體 くる……くる 友だち を 待つ。

(注意)○終止段と連體段とは同形である。

か行變格活用の動詞の段

命令段

さ行變格活用の動詞の段

假定 くれ……早く 友だち が くれ ば よい。
命令 こよ……早く こよ。

(注意)○四段活用の動詞は、他の語を添へなくても命令の意となるが、この活用の動詞では、將然段のこによを添へねば命令の意とならぬ。○このこにいを添へても命令の意となるが、成るべく用ひぬ方がよい。

さ行變格活用の動詞の段は、次の通りになる。

將然 せい(う)……善い 事を せう。

(注意)○さ行變格活用の將然段は、せい兩様に活用する。そして、せいにはうが添はつて將然の意をあらはし、しにはようが添はつて將然の意をあらはす。但し、今日の普通語では、多くしようの方を用ひる。○このせにぬ(ん)をつけたせいぬ(ん)、及びしにないをつけたし(ない)は、共に否定の意を表はす。

連用 し……仕事 を し はてる。

(注意)○このしは、讀みもし、書きもするのやうに、中止の形にもなる。

上一段活用の動詞の段

終止 する……善い 事 を する。

連體 する……善い 事 を する 人。

(注意) 終止段と連體段とは同形である。

假定 すれ……善い 事 を すれば、よい 報

がある。

命令 せよ……善い 事 を せよ。

(注意) 命令段を作るには、將然段のせによをつけて之を作る。

○このせにいをつけて、又はしにろをつけて、せい、しろのやうにいふこともあるが、成るべく用ひぬ方がよい。

上一段活用の動詞の段は、次の通りになる。

將然 起き(よ)う……やがて、起き よう。

(注意) 〇この段の動詞にぬ(ん)、ないをつけた起きぬ(ん)、起きないは、否定の意になる。

連用 起き……寝床 から 起き あがる。

(注意) 〇この段の動詞は、早く起き、遅く寝るのやうに、中止の形になることがある。又、早起きをするのやうに、他の語と熟して名詞の形になることもある。

終止 起きる……朝 は 早く 起きる。

連體 起きる……早く 起きる 人は、勤勉 の

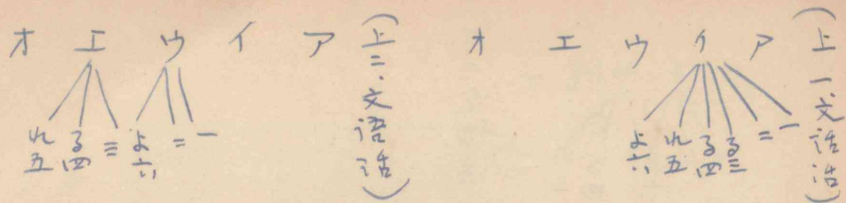
人 である。

(注意) 〇上一段活用の動詞は、將然段と連用段と同形で、終止段と連體段とも亦同形である。

假定 起きれ……早く 起きれば、心持ち が よい。

命令 起きよ……早く 起きよ。

(注意) 〇上一段活用の命令段も、亦將然段の語によを添へて之を作る。○よの代りに、い、ろを添へて、起きい、起きろのやうにいふこともあるが、成るべく用ひぬ方がよい。



下一段活用の動詞の段

下一段活用の動詞の段は、次の通りになる。

將然 明け^よ…やがて、夜^が 明け^{よう}。

(注意)○この段の動詞にぬ^ん、ない^をつけた明けぬ^ん、明けない^は、否定の意になる。

連用 明け[…]…夜^が 明け^離れた。

(注意)○この段の動詞は、夜も明け、空も晴れたのやうに、中止の形にもなり、又夜明けの景色のやうに、他の語と熟して名詞の形にもなる。

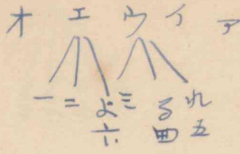
終止 明け^る…夜^が 明け^る。

連體 明け^る…夜^の 明け^る 頃^{まで}、昔話^をした。

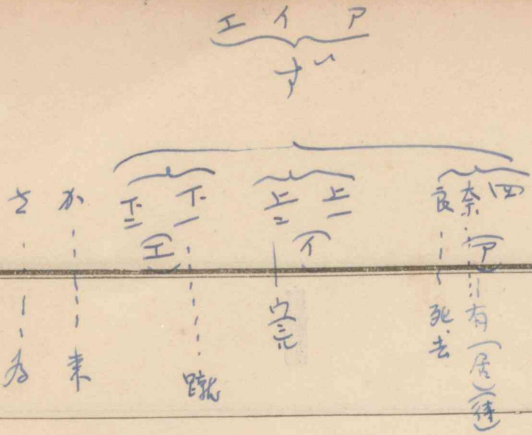
(注意)○下一段活用も、上一段活用と同様に、將然段と連用段とが同形で終止段と連體段とも亦同形である。

假定 明け^れ…早く^夜が 明け^{れば}よ。

(下二文法活)



區別法



以上五種の動詞の段を表にして左に示さう。

活用	四段	か行 變格	さ行 變格	段上一	段下一
語根	讀	「來」	「爲」	起	明
將然段	ま ^ま	こ ^こ	し ^せ	さ ^さ	け ^け
第二段	み	き	し	さ	け
第三段	む	くる	する	さる	ける
第四段	む	くる	する	さる	ける
第五段	め	くれ	すれ	され	けれ
第六段	め	こよ	せよ	さよ	けよ

命令 明けよ…早く 明けよ。
(注意)○下一段活用の命令段も、亦、將然段の語によを添へてこれを作る。○よの代りに、いろを添へて、明けい、明けろの如くいふこともあるが、成るべく用ひぬ方がよい。

四段いよナレ
開きよナレ
いろナリ

第四節 動詞の自他

鳥 が 鳴く。 火 が 消える。

自動詞
右の鳴く、消えるは、その動作を起す事物、即ち鳥火の動作をいひあらはすばかりで、他の事物を左右する性質を持つて居ない。かやうに、動作を他物に及ぼさぬ動詞を自動詞といふ。

子供 が 「犬」 を 追ふ。

蠶 は 「桑」 の 葉 を たべる。

右の追ふ、たべるは、それに犬、桑の葉などいふ目的の語を加へなければ、動作者即ち子供や蠶の動作を完全にいひあらはすことが出来ぬ。即ち子供が追ふ、蠶は食べるだけでは意味が通ぜぬ。かやうに、その動作を他物に及ぼ

他動詞

す動詞を他動詞といふ。

(注意) 〇他動詞の目的となる語には、通例をといふ語を添へる。しかし「人が路をあるく、鳥が空を飛ぶ、子供が門を出る」のやうに自動詞あるく、飛ぶ、出るの標準を示す路、空、門等の語に添ふこともある。

動詞には、

(自動)

風が吹く。(か四)

門が閉ぢてある。(た上二)

柳の枝が垂れて居る。

(ら下二)

のやうに、自他によつて活用の違はぬものもある。又、

(自動)

子供が育つ。(た四)

(他動)

人が笛を吹く。(か四)

門を閉ぢて、人を容れぬ。

(た上二)

柳が、枝を垂れて居る。(ら下二)

(他動)

子供を育てる。(た下二)

帯が解ける。(か下二)

帯を解く。(か四)

日が延びる。(ば上二)

日を延べる。(ば下一)

のやうに、自他によつて活用の違ふものもある。又、

足る(ら四) 足す(さ四)

通る(ら四) 通す(さ四)

隠れる(ら下二) 隠す(さ四)

流れる(ら下二) 流す(さ四)

乗る(ら四) 載せる(さ下二) 寄る(ら四)

寄せる(さ下二)

のやうに、語尾のす、せるとる、れるとによつて、自他の區別のあるものもある。又、

生きる(か上二) 生かす(さ四)

動く(か四)

動かす(さ四)

燃える(あ下二) 燃やす(さ四)

懲りる(ら上二) 懲らす(さ四)

盡きる(ら上二) 盡くす(さ四)

起きる(か上二) 起こす(か四)

落ちる(た上二) 落とす(さ四)

及ぶ(ば四)

及ぼす(さ四)

練習

のやうに、自動詞の語尾が、あ段、う段、又はお段となつて、これにすの語尾がついて、他動詞になるものもある。又、
ふたぐ(が四) ふたがる(ら四) 止める(ま下二) 止まる(ま四)
のやうに、他動詞の語尾があ段となつて、これにるの語尾がついて自動詞になるものもある。
次の動詞の自他を區別せよ。又、これに對する自動又は他動の動詞があるなら、これを示せ。

助ける。わかる。滅びる。干す。おびやかす。照る。
塞がる。苦しむ。碎ける。馴らす。出す。倒れる。

第五節 動詞の音便

花(ハナ)が 咲(キ)いた。
急(キ)いで 見(ミ)に行(イ)かう。

動詞の音便

い音便

先生に問うて、見よう。
 花は散つても、惜しくない。
 字を書いたり、本を読んだりする。
 右の例のやうに、四段活用の動詞の連用段が、た(だ)て(て)ても(も)たり(だ)りと續くときには、その語尾が、い、う、つ、んなどに轉ずることがある。これを動詞の音便といふ。
 動詞の音便を別けて、い音便、う音便、撥音便及び促音便の四種とする。
 い音便とは、動詞の語尾のき、ときが、いに轉じたものといふ。次の例を見よ。

咲き
たてたりも……

咲い
たてたりも

急ぎ
たてたりも……

急い
たてたりも

う音便

(注意) ○ぎが、い音便に轉ずる時には、次につづく語が濁音になる。
 ○近畿地方では、動詞の語尾のしをいに轉じて、指した、指して、指しても、指したりを、指いた、指いて、指いても、指いたりなどのやうにいふ。
 ○「咲ひた、急ぬて、指ひたり」などと書いてはならぬ。
 う音便とは、動詞の語尾のひが、うに轉じたものといふ。次の例を見よ。

問ひ
たてたりも……

問う
たてたりも

(注意) ○「問おた、問ふた」などと書いてはならぬ。

撥音便とは、動詞の語尾のに、び、みが撥音んに轉じたものといふ。次の例を見よ。

死に
たてたりも……

死ん
たてたりも

飛び
たてたりも……

飛ん
たてたりも

促音便

(注意)○撥音便に轉ずるときには、次につづく語が濁音になる。
促音便とは、動詞の語尾のち、ひ、りが促音に轉じたものをいふ。次の例を見よ。

讀み たりも …… 讀ん だりも

持ち たりも …… 持つ たりも 思ひ たりも …… 思つ たりも

散り たりも …… 散つ たりも

練習

次の文の中の音便を説明せよ。

1. 棒ほどの事を願って、針ほどかなふ。
2. きのみは、終日雨が降ったり、風が吹いたりした。
3. 細い道を、川に沿うて、南を指いて下って行った。

4. 朝は星を戴いて出、晩は月を踏んで歸る。

5. 昨日は、日曜日であつたから、海濱にいつて、舟を漕いだり、水を泳いだりした。

第五章 形容詞

第一節 形容詞の意義

山 が 高く、水 が 美しい。
水 が 清ければ、飲料 に しよう

右の高く、美しい、清ければ、物事の性質や有様をあらはす語である。かやうな語を形容詞といふ。

第二節 形容詞の活用

前例の形容詞の中で、清ければ、

水 が 清く 澄む。

形容詞

語根
語尾

水が清い。
水が清ければ、飲料にしよう。
のやうに、清く、清い、清けれと活用する。而して、清のやうに變化しない部分を語根といひ、く、い、けれのやうに變化する部分を語尾といふ。
形容詞には、語根にし又はじのあるのと、ないのとある。しかし、その活用は、ただ前に述べた一種である。次の表を見よ。

語根	語尾
高 美 同 じ	く い けれ

(注意) ○文語では、第一類第二類の別があつて、語根にし又はじがつくと

連用
終止
体
已

長
く
く
し
き
け
ん

ク
ク
イ
イ
ケ
レ

娃
ク

ウ
ゴ
サイ
マ
ス

ア
リ
カ
タ
ク
ア
リ
マ
ス

第五章

形容詞

ゴ
サイ
マ
ス
ニ
ツ
ク
場
合
ハ

㊦

一
口
字
法
を

四三

形容詞の
段

連用段

副詞形
名詞形
中止形

つかないとして、活用が幾らかちかふが、口語では全く一樣になる。
○同じといふ形容詞は、通常、いゝの語尾を加へず使用される。
第三節 形容詞の段
形容詞も、亦動詞のやうに連用、終止、連體、假定等の段に分けることが出来る。今、清いといふ形容詞についてこれを説明しよう。

水が清く 澄む。

右の清くは、用言澄むに續く。故にこれを連用段といふ。

(注意) ○形容詞の連用段は、多く下にある動詞などの意味を限定するに用ひることは、前例に示す通りである。

○この清くを、音便で清うといふことがある。即ち、う音便の一種である。「うれしう思ふ」「ありがたうぞんじます」などのうも、亦此の例である。

○この清く、うれしく、ありがたくなどが、てもにつくときには、清くつ

て、うれしくつても、ありがたくつてのやうに、促音に伴ひ、或は清うて、うれしうても、のやうに、う音便に轉じる。

この段の形容詞は、又、

水は清く、沙は白い。

のやうに、中止の形に用ひ、或は、

遠くの親類より、近くの他人。

のやうに、名詞の形に用ひる。

水は清い。

終止段

右の清いは、事を言ひ切つた形である。故にこれを終止段といふ。

水の清い川。

連體段

右の清いは、體言につづく形である。故にこれを連體段といふ。

水が清ければ、飲料にしよう。

假定段

右の清ければ、事を假に定めていふ形である。故にこれを假定段といふ。

(注意) ○ 文語形容詞の清ければは已然の意で、口語ていふ清ければとは意味が違ふ。

以上を表にすれば、次の通りになる。

語根	連用	終止	連體	假定
清	く	い	い	けれ

(注意) ○ 水が清くば、飲料にしようのやうに、清くを動詞の將然段のやうな形に用ひることもあるが、これは、口語では普通な言ひ様ではない。よつて表からはこれを省いて置く。

○ 形容詞の連用段があるにつづくときには、その語尾のくと、あるのあとが約まつて、から、かりと活用する。而して、からは將然段、かりは連

寒イトリ
水イトリ
如く関係詞
アアラハコトカ
マシイ

(副詞形マナシ)

形容詞

アキラカニアリたり
破々トアリたり
清クアリたり

第五章 形容詞

用段である。次の例を見よ。

善からう。善かりさうだ。

美しからう。美しかりさうだ。

○このかりが、た又はたりにつづくときは、音便で、りが促音になる。

次の例を見よ。

善かつた。美しかつた。

○對稱する場合に限って、遅かれ早かれのやうに、かれといふ命令段を用ひることがある。

次の文の形容詞の段を示せ。

- 1、廣く長い橋を渡つて、にぎはしい町に出た。
- 2、戸外の遊戯は數が多いけれど、ベースボールほどおもしろい遊戯は少ない。
- 3、須磨のあたりは、松が青く沙が白くつて、風景の美しいことは、繪も及ばぬ。

次の文に假名遣の間違があるなら直せ。

練習

- 4、悲しひこともあれば、うれしむこともある。
- 5、おそろしい雨ををかして、一隊の兵士が、隊伍正しふ進んで來た。

第六章 助動詞

第一節 助動詞の意義

花は まだ 咲かぬ。

はや 日 が 暮れ た。

右のぬ、たなどは、動詞の下に附いて、その意味を助けてゐる。かやうな詞を助動詞といふ。

第二節 助動詞の種類、活用及び動詞との續

き方。

助動詞は、その動詞に添うて表はす意味によつて、次の九種に分ける。今一一これを略説しよう。

助動詞

第六章 助動詞

時の助動詞

完了又は過去の助動詞

一、時の助動詞 「雨が降る」「鳥が歌ふ」などのやうに、現在の動作を表はすには動詞の終止段をそのまま用ひればよいが、過去に起つた動作や、未來に起るべき動作を示さうとするには、助動詞の助を借らねばならぬ。かやうに、動詞を助けて、過去の動作や未來の動作を表はす語を總稱して時の助動詞といふ。

時の助動詞に完了又は過去を表はすものと、未來を表はすものとある。完了又は過去を表はすには、たを用ひる。次の例を見よ。

今しがた 學校 から 歸つ た。(完了)

昔、太閤 と いふ 英雄 が 居 た。(過去)

(注意) たが、が行、な行、ば行、ま行の四段活用動詞に附く時には、音便で

動詞の語尾がい又はんに轉じ、それと同時にたがだになる。次の例を見よ。

磨トいだダ (が行) 往イんだダ (な行) 飛トんだダ (は行) 讀ミんだダ (ま行)

たは動詞の連用段につづきたら、て、たと活用する。而してその各段の用法は次の通りである。

將然 たらたら 公園 の 櫻 は、もう 咲い

たらたら う。

連用 て て 公園 の 櫻 が、美しう 咲

いて いて 居る。

終止 た た 公園 の 櫻 は、もう 咲い

た。

連體 た た 花 が 咲い た 頃、花見

に 出かけ よう。

假定

たらたら花はながが咲さい たら、花見はなみを
し よう。

(注意) ○ 將然段と假定段とは同じ形で、終止段と連體段とも亦同じ形である。

○ 將然段は、多くうと結び付いて過去を推量する意となる。

○ 時としては、いって見たら、花は散って居た。のやうに、たらを既定の意に用ひることがある。又たれにばを附けて、いって見たれば……」
などいふ人もある。

○ このてを助詞として論じる人もある。

未來を表はすには、う又はようを用ひる。 次の例を見よ。

明日あしたは、雨あめが降ふらう。
おつつけ、日ひが暮くれよう。

うは、四段活用の動詞の將然段に續き、ようは、其の他の活用の動詞の將然段に續く。但し、さ行變格の活用には、爲なよ

未來の助動詞

打消の助動詞

うとつづいて、爲なようとはつづかぬ。 次の例を見よ。

(四) 咲さかう。
 (か變來) よう。
 (さ變) 爲なう。
(上二) 落ち よう。 (下二) 捨て よう。

二、打消の助動詞 ぬぬ、ない、まいなどの助動詞は、

風かぜは吹ふかぬ。
 (ぬん) ない。
 (まい) まい。

風かぜは吹ふくまい。

のやうに、動作、有様を打消す意に用ひる。 よって打消の助動詞といふ。但し、まいは推量して打消すに用ひる。

ぬ、ないは動詞の將然段に續く。但し、さ行變格の將然段に續く時には、次のやうになる。

せぬぬ、しなな。

まいは四段活用の終止段、その他の活用の將然段に續く。

次の例を見よ。

- (四) 行く まい。 (か變) 來 まい (さ變) 爲 まい
- ↑ 起き まい。 ↓ 捨て まい。

(注意) ○ まいは、文語のまじの音便である。

○ 地方によつては、くまい、くるまい、すまいするまいなどともいふ。

ぬはず、ぬ(ん)、ねと活用する。而してその各段の用法は次の通りである。

連用 ず……雨 が 絶 え ず 降る。

(注意) ○ このずは「雨も降らず、風も吹かぬ」のやうに、中止の形に用ひることがある。又「見ず知らず」の人のやうに、他の語と合して名詞の形に用ひることもある。

終止 ぬ(ん)……雨 が 絶 え ぬ(ん)。

連體 ぬ(ん) 雨 の 降 ら ぬ(ん) 日 は 少

ない。

假定 ね……もう 雨 が 降ら ね ば よい に。

(注意) ○ 終止段ぬの過去になんだといふがある。これは「昨日は行かなんだらう」(將然)、「昨日は行かなんだ」(終止)、「昨日行かなんだ人連體」(行かなんだら假定)困るだらうのやうに活用する。

ないは、なく、ない、なけれと活用する。そしてその段は次の通りになる。

連用 なく……友だち が 來 なく なる。

(注意) ○ このなくは、動詞ありと結びついて、なから將然(なかり連用)と活用する。次の例を見よ。

「ともだちが來なからう。」ともだちが來なかりさうだ。

○ このなかりのりは、たたりにつづくときには、なかつた、なかつたりのやうに、音便で促音つに轉じる。

推量の助動詞

終止 ない……今日も 友だち が たづね
て 来 ない。

連體 ない……友だち の 来 ない 日は
さびしい。

假定 なけれ…友だち が 来 なければ、淋
しから う。

まゐは活用せぬ。

三、推量の助動詞 う、よう、らしいは、

あ の 山 は 多分 海拔 七千尺 も ある
て あら う。

あ の 木 は 多分 枯れ よう。
あの男 は なかなか 勉強する らしい。

のやうに、動作又は有様を推量していふに用ひる。よつてこれの推量の助動詞といふ。

うは四段活用の動詞の將然段につゞき、ようはその他の活用の動詞の將然段につゞき、らしいはすべての動詞の終止段につゞく。

(注意) う、ようは、未來の助動詞の轉じたものである。

○ う、ようは、さ行變格の將然段につゞく時に限つて次のやうになる。

せう しよう

○ 文語のけん(過去を推量する助動詞)の意味は、口語では、たらうの二つの助動詞を連ねてこれをあらはす。

花は もう 散つ たらう。

う、ようは、活用せぬ。らしいは、らしく、らしいと活用する。

そして、その各段の用法は次の通である。

連用 らしく…雨が 降る らしく 見える。

(注意)○このらしくは、音便でらしうとなることがある。

○らしくにあったかつづく時には、約まって、らしかつたとなる。

終止 らしい…雨が 降る らしい。

連體 らしい…雨が 降る らしい 天氣模様

て ある。

(注意)○らしいは、文語のらしの轉じたものである。

受身の助動詞

四、受身の助動詞 れる、られるは、

猫 が、犬 に かま れる。

馬丁 が、馬 に 蹴 られる。

のやうに、他のものから動作をしかけられる意に用ひる。よつてこれを受身の助動詞といふ。

れるは四段活用の動詞の將然段につき、られるはその他の活用の動詞の將然段につく。次の例を見よ。

(四) かま れる。 (か變) 來 られる。

(さ變) 爲 られる。 (上二) 起き られる。

(下二) 捨て られる。

(注意)○さ行變格活用の動詞の語尾せにられるがつくときには、多くはせらが約まってさとなる。次の例を見よ。

せられる…される。 譴責せられる…譴責される。

れるは、れ、れる、れれと活用し、られるは、られ、られる、られれと活用する。そして、その各段の用法は次の通である。

將然 れ…親 に 叱 ら れ よう。

(注意)○此のれに、ぬんないを附けて、叱られぬん(叱られな)とすれば、否

定の意になる。

連用 親に叱られた。

(注意)此の段の語は、又親には叱られ、人には笑はれるのやうに中止の意に用ひることがある。

終止 親に叱られる。

連體 親に叱られる子供。

(注意)將然段と連用段及び終止段と連體段とは同形である。

假定 親に叱れば、つらから

う。

命令 親に叱られよ。

(注意)これにいろをつけて、命令を表はすこともあるが、用ひぬ方がよい。られるの例

將然 馬に蹴られよう。

(注意)此の段の語にぬ(ん)ないをつけて、蹴られぬ(ん)蹴られないとす

れば、否定の意になる。

連用 馬に蹴られた。

(注意)此の段は、又馬には蹴られ、牛にはつかれるのやうに、中止の意にも用ひる。

終止 馬に蹴られる。

連體 馬に蹴られる馬丁。

(注意)將然段と連用段及び終止段と連體段とは同形である。

假定 馬に蹴られれば、痛から

う。

命令 馬に蹴られよ。

(注意)これにいろをつけて命令を表はす事もあるが、用ひぬ方がよい。

五、可能の助動詞

一日に十里は行かれる。

可能の助動詞

私も此の問には答へられる。
 のやうに、自分の力である動作をすることができる意を示す。かやうに用ひたときは、これを可能の助動詞といふ。可能の助動詞れる、られるは、その活用も、段も、動詞とのつづき方も、全く受身の助動詞と同様である。但し、命令段はない。

四段活用の動詞に可能のれるがつくときには、その語尾とれとが約まって、え段の音になる。次の例を見よ。

読まれる—読める。 打たれる—打てる。
 飛ばれる—飛べる。 言はれる—言へる。

(注意)〇さ行變格の動詞の將然段せに、られるがつくときには、せ、らが約まってさとなることは、前の受身の場合と同様である。

使役の助動詞

六使役の助動詞 せる、させるは、

左官に壁を塗らせる。
 大工に家を建てさせる。

のやうに、他のものを使役してある動作をさせる意を示す。よつてこれを使役の助動詞といふ。

せるは四段活用の將然段につづき、させるはその以外の活用の將然段につづく。但し、さ行變格活用には、爲させるとつづいて、爲させるとはつづかぬ。次の例を見よ。

(四)塗らせる。(か變)來させる。(さ變)爲させる。
 (上一)起きさせる。(下一)捨てさせる。

(注意)〇さ行變格の動詞の將然段にさせるがつく時には、せ、さが約まってさとなる。次の例を見よ。

せさせる—させる。 勉強せさせる—勉強させる。

せるは、せ、せる、せれと活用し、させるは、させ、させる、させれと活用する。そして、その各段の用法は次の通りになる。

未然 せ…左官に壁を塗らせよう。

(注意) このせにぬ(ん)ないをつけた塗らせぬ(ん)、塗らせないは、否定の意になる。

連用 せ…左官に壁を塗らせた。

(注意) この段のせは、壁を塗らせ、屋根を葺かせるのやうに、中止の形にも用ひる。

○ 將然段と連用段とは同形である。

終止 せる…左官に壁を塗らせる。

連體 せる…左官に壁を塗らせる事

に きめ た。

(注意) 終止段と連體段とは同形である。

假定 せれ…あの左官に壁を塗ら

せれば、うまく塗るだらう。

命令 せよ…壁を塗らせよ。

(注意) 〇せにいろをつけて命令を表はすこともあるが用ひぬ方がよい。させるの例

將然 させ…大工に家を建てさせよ

う。

(注意) このさせにぬ(ん)ないをつけた建てさせぬ(ん)は、否定の意を示す。

連用 させ…大工に家を建てさせた。

(注意) このさせは、家を建てさせ、屋根を葺かすのやうに、中止の意にも用ひる。

○ 將然段と連用段とは、同形である。

終止 させる…大工に家を建てさせる。
連體 させる…大工に家を建てさせる人。

(注意)○終止段と連體段とは、同形である。

假定 させれ…あの大工に建てさせれば、うまく建てるだらう。

命令 させよ…大工に家を建てさせよ。

(注意)○させに^いるをつけて命令を表はす事もあるが、用ひぬ方がよい。

尊敬の助動詞

七、尊敬の助動詞 れる、られる、ますは、

先生 は、よく 字 を 書か れる。

父上 は、毎朝 早く 起き られる。

今日 は、よい 天気 で ござい ます。

のやうに、他人の動作を敬つて言ふ場合や、動作を丁寧

いふ場合などに用ひる。よつてこれを尊敬の助動詞といふ。れる、られるの動詞との續き方、活用及び段は、すべて受身のれる、られると同様である。

ますは動詞の連用段につづき、ませ、まします、ますれと活用する。そして、その各段の用法は次の通りである。

將然 ませ…やがて、雨が降りませう。

(注意)○このませにぬ(ん)をつけた降りませぬ(ん)は、否定の意になる。

○否定のないは、ませにはつかぬ。

連用 まし…雨が降りました。

終止 ます…雨が降ります。

(注意)○このますに^るをつけて、雨が降りますともいふ。

連體 ます…雨の降ります日は、陰気です。

假定 ますれ…雨が降りますれば、困水
が 出 ませう。

命令 ませ…どうぞ、お許し 下さいませ。

(注意) このませをましといふこともある。

○このませ又はましは、尊敬又は謙遜の意を有する動詞なざる、下さる、遊ばすなどの連用段なさり(音便 下さり)、遊ばしなどにはかりつく。

指定の助動詞

八、指定の助動詞 だ、てすは、

これは 私の 本だです。

あそこに ある の は

誰だです。

私は 散歩する のだです。

のやうに、ある事柄を指定していふ意に用ひる。よつて、これを指定の助動詞といふ。

だ、てすは、體言につき、又のを媒として、體言並に用言の連體段につく。前の例を見よ。

(注意) ○だ、てすは、又動詞の連用段におを冠せたるものにもつく。次の例を見よ。

字をお書きだ。

非常なお喜びだです。

どちらへお出でですか。

だはだら、だつてだと活用し、てすはでせてして、てすと活用する。今その各段の用法を次に述べよう。
だの例

將然 だら…これは、あなたの本 だらう。

連用 だつ…あれは、私の本 だつた。

(中止) で……これは私の本で、あれは友人の本だ。

(注意) ○他の多くの場合には、連用段が中止の形になるがこの助動詞では、さうでなう。

終止 だ……これは、私の本だ。

ですの例

將然 でせ……あの人は、どこへ行く

のでせう。

連用 てし……あれは、学校へ行くので

した。

(中止) で……これは、時事新報で、あれは

朝日新聞です。

(注意) ○だもですも、中止の意を表はすときには、同じくでとなる。

終止 です……あの子供は、学校へ行くのです

(注意) ○だにも、ですにも連體段はない。

○だらでせに推量のうを加へただらうでせうは、熟して推量の助動詞になる。そして、用言の連體段につづく。次の例を見よ。

雨が降るだらう。 もう、よほど遅いてせう。

○雨がもう止んだらうのやうに、過去推量のたらうが音便でだらうと濁ったものと、前例のやうな本来のだらうとを混じてはならぬ。

○のを媒として、だ、ですが用言の連體段につく時には、そののが撥音んに轉じることがある。次の例を見よ。

歸るんだ。 悪いんです。

右の外、指定助動詞の一種にならると活用するものがある。これは、或一種の體言(靜か立派の類)につく。そして、なは連體段ならは假定段である。次の例を見よ。

な (連體) …… 静かな庭

なら (假定) …… 庭が少し静かなら、よからうに

(注意) このなならば、文語指定の助動詞なりの轉じたものである。

○この静かな、立派などを、形容詞として論ずる人もある。

○ならの下にはばを加へて、假定の意に用ひることもある。

希望の助動詞

九、希望の助動詞 たいは、

勉強もしたい、運動もしたい。

のやうに、ある事柄を希望する意に用ひる。よつてこれを希望の助動詞といふ。

たいは用言の連用段に附いて、たく、たい、たけれと活用する。そして、その各段の用法は次の通りである。

連用 たく…本を讀みたく思ふ。

(注意) このたくは、う音便でたうに轉ずることがある。

○この段は、又、本も讀みたく、字も書きたいのやうに中止の形になることもある。

○たくに動詞のあるがつくと、約まってたから、たかりとなる。次の例を見よ。

見たからう。 見たかりさうだ。

○このたかりのりは、又た或はたりにつづく時には、促音便となる。次の例を見よ。

見たかった。 見たかったり、聞きたかったりする。

終止 たい…本が讀みたい。

連體 たい…讀みたい本を讀む。

(注意) 終止段と連體段とは同形である。

假定 たけれ…讀みたければ讀め、書き

たければ書け。

文語

文法...の外

詠 歎

比 喩

(比喩)

△文法助動詞活用

(一)助動詞活用如キニ
(二)下ニ放活用如キニ

(注意)〇たいは文語のたしにあたる。
 〇たくを將然段に用ひて、行きたくば行かうのやうにいふことがある。
 しかし、口語ではあまり用ひぬ。

次に助動詞の種類と活用との一覽表を掲げよう。

推量	打消		時				動詞	將然	連用 (中止)	終止	連體	假定	命令
			未來		過去								
			來	讀	來	讀							
來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^キ	たら(う)	て	た	た	たら	×	
(らしから)	×	×	×	×	×	(たらう)	(で)	(だ)	た	(だ)	(だら)	×	
來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^キ	たら(う)	て	た	た	たら	×	
(らしから)	×	×	×	×	×	(たらう)	(で)	(だ)	た	(だ)	(だら)	×	
來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^キ	たら(う)	て	た	た	たら	×	
(らしから)	×	×	×	×	×	(たらう)	(で)	(だ)	た	(だ)	(だら)	×	
來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^ク 讀 ^む	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^キ	たら(う)	て	た	た	たら	×	
(らしから)	×	×	×	×	×	(たらう)	(で)	(だ)	た	(だ)	(だら)	×	

ラシから たい たい なければ

タリ タリ タリ

キ ケリ

マホシ

フ ヒト サス
 タリ ナリ ナリ
 ナリ ナリ
 ナリ ナリ
 ナリ ナリ
 ナリ ナリ
 ナリ ナリ

(1) 奈妻 輝文

(2) 形 同 如 キ

(3) 持 種 如 キ

練習

次の文の助動詞の種類、活用、動詞との續き方を説明せよ。

希望	指定		尊敬		使役		可能	受身
	來 ^キ	讀 ^み	來 ^コ	讀 ^ま	來 ^コ	讀 ^ま		
(たから)	×	×	ら	れ	さ	せ	ら	れ
(たかり)	×	×	ら	れ	さ	せ	ら	れ
たい	×	×	ら	れる	さ	せる	ら	れる
たい	×	×	ら	れる	さ	せる	ら	れる
たけれ	×	×	ら	れれ	さ	せれ	ら	れれ
×	×	×	ら	れよ	さ	せよ	ら	れよ

*尊敬の助動詞ますの命令段ませと動詞とのつづき方については、六十六頁(注意)の條を見よ。

マホシ タリ タリ

シホス

ス

シホス

ス

ス

ス

※ 品名打合せ、分類法ナリ

助動詞相
互の接續

1. 雨がやんだら散歩に出よう。
2. ここに塵をすててはならぬ。
3. どうか人間らしい人間になつてもらひたう。
4. 雨は降るだらう、しかし、風は吹くまい。
5. 珍らしいはございますまいが、遠方から到来した品でありますから、お目に懸けたのです。
6. 庭は下女に掃除をさせよう。おまへは、座敷の掃除をせよ。
7. 父は父の道をつくさないでも、子は子の道を守らねばならない。

第三節 助動詞と助動詞のつづき方

東京 も 大雨 が 降っ たら う。

某 大將 は、 戦死せ られ た らしい。

右の例のやうに、助動詞はただ動詞につくばかりでなく、他の助動詞にもついて、その語の意味を強めたり、完全にしたりする。即ち、たらうは過去のたらに推量のうが添

はって過去の推量を表はし、られたらしいは、尊敬のられに、過去のた、推量のらしいが添はって、過去の推量を丁寧

に言ひ表はして居る。すべて、ある助動詞が他の助動詞につづくのは、その助動詞が動詞につづく規定と大略同様である。例へば、たらうのうは動詞の將然段につづく助動詞であるから、助動詞にも亦將然段（ここでは過去の助動詞たるの將然段たらにつづいて居る。）に續き、戦死せられたらしいのたは動詞の連用段につづく助動詞であるから、助動詞にも亦連用段（ここでは尊敬助動詞られるの連用段られにつづいて居る。）につづき、らしいは動詞の終止段につづく助動詞であるから、助動詞にも亦終止段（ここでは過去助動詞の終止段たにつづいて居る。）につづく類である。併し、まゝ例外もある。

次に助動詞と助動詞との続き方の重なるものの一覽表を掲げよう。

使役	可能	受身	推量	打消	時	完了	助動詞の種類	段
させ	られ	られ	(らしから)	(なから)	過ぎ	た	た	將然段
ない	ない	ない	う	う	う	う	う	助動詞
ませ	られ	られ	(らしかつ)	(なかつ)				連用段
たい	たい	たい	た	た				助動詞
させる	られる	られる		ない		だ	だ	終止段
(の)で	(の)で	(の)で		(の)で		(の)で	(の)で	助動詞

辭 變化表 助動詞 終止段 連用段

(注意)

○終止段と連體段とは同形であるから、便宜上この二段を一括して掲げた。詳しいことは、一本文と對照せよ。

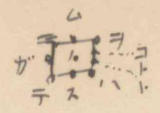
第七章 助詞

第一節 助詞の意義

孝は百行の本である。

天照大神の御事 第七章 助詞

漢文ヲ清ク點ス



助詞

風が吹けば、花が散る。
私にも、それを下さい。
逢ふのは、嬉しいが、別れるのは、悲しい。

右のは、ので、がば、にも、をなどは、名詞、代名詞、動詞、形容詞などの間にはさまって、上の語句と下の語句との關係を定める語である。かやうな語を助詞といふ。

(注意)○助詞は、又天爾乎波助辭などともいふ。

第二節 助詞の種類及び用法

助詞には、體言にばかり附くものと、種種の語に附くものと、用言にばかり附くものとある。

一、體言につく助詞 この類の助詞は、が、の、に、を、と、へ、から

體言につく助詞

(1)

が

の

まで、より、で、や、だのなどである。今次にこれらの用法を畧説しよう。

がは、花が咲く、鳥が啼くのやうに、文の主となる體言の下に附く。

(注意)○がは又體言のやうに用ひられた語句の下にもつく。次の例を見よ。

行きたいなら、行くがよい。 顔は、白いがよい。
その新らしいのが私の本です。

のは、「私の本」「犬の足」などのやうに、下の體言を所有する意を示すに用ひ、又は「栗毛の馬」「九州のうまれ」などのやうに、下の體言を限定する意に用ひる。

のは、又「私の讀んだ本」「誰れのいった話」などのやうに、文章の主題となる語を示す時にも用ひ、又「鳥の啼く」の(聲)が聞

える「叱られるの」事がつらい、「安い」の「品」を買ふのやうに、名詞に代用される。但し、名詞に代用されるときには、いつも用言の連體段の下につく。

に^八に^九

に^{一〇}には、「机の上に本がある」のやうに、位置を示す場合、「蚪が蛙になる」のやうに、物の歸著することを示す場合、「花見に行く」のやうに、動作の標準を示す場合、「父に叱られる」、「騎兵に敵を搜索させる」のやうに、受身或は使役の動作をする者を示す場合、「ビールに正宗」、「鮮に辨當」のやうに、物事を並列する場合、「竹に虎」、「梅に鶯」のやうに、物事を配合する場合、「鳥獸に劣る」のやうに、比較の標準を示す場合などに用ひる。

（注意）〇泣くに泣かれぬのにのやうに、連體段の動詞について、その下に

を^一
に^二
を^三
を^四
を^五
を^六
を^七
を^八
を^九
を^{一〇}
を^{一一}
を^{一二}
を^{一三}
を^{一四}
を^{一五}
を^{一六}
を^{一七}
を^{一八}
を^{一九}
を^{二〇}
を^{二一}
を^{二二}
を^{二三}
を^{二四}
を^{二五}
を^{二六}
を^{二七}
を^{二八}
を^{二九}
を^{三〇}
を^{三一}
を^{三二}
を^{三三}
を^{三四}
を^{三五}
を^{三六}
を^{三七}
を^{三八}
を^{三九}
を^{四〇}
を^{四一}
を^{四二}
を^{四三}
を^{四四}
を^{四五}
を^{四六}
を^{四七}
を^{四八}
を^{四九}
を^{五〇}
を^{五一}
を^{五二}
を^{五三}
を^{五四}
を^{五五}
を^{五六}
を^{五七}
を^{五八}
を^{五九}
を^{六〇}
を^{六一}
を^{六二}
を^{六三}
を^{六四}
を^{六五}
を^{六六}
を^{六七}
を^{六八}
を^{六九}
を^{七〇}
を^{七一}
を^{七二}
を^{七三}
を^{七四}
を^{七五}
を^{七六}
を^{七七}
を^{七八}
を^{七九}
を^{八〇}
を^{八一}
を^{八二}
を^{八三}
を^{八四}
を^{八五}
を^{八六}
を^{八七}
を^{八八}
を^{八九}
を^{九〇}
を^{九一}
を^{九二}
を^{九三}
を^{九四}
を^{九五}
を^{九六}
を^{九七}
を^{九八}
を^{九九}
を^{一〇〇}

可能の打消を表はした詞を添へたものや、「新聞をお読みになる」の「のやうに」動詞の連用段におを冠らせた語の下に「いたものも、やはり此の類の」である。

を^一は、「猫が鼠を追ふ」、「子供が紙鳶を揚げる」の「のやうに」他動の動作を受ける事物を示すに用ひ、又は「鳥が空を飛ぶ」、「朝日が山を出る」のやうに、自動の動作の行はれる場所を示すに用ひる。

と^一
と^二
と^三
と^四
と^五
と^六
と^七
と^八
と^九
と^{一〇}
と^{一一}
と^{一二}
と^{一三}
と^{一四}
と^{一五}
と^{一六}
と^{一七}
と^{一八}
と^{一九}
と^{二〇}
と^{二一}
と^{二二}
と^{二三}
と^{二四}
と^{二五}
と^{二六}
と^{二七}
と^{二八}
と^{二九}
と^{三〇}
と^{三一}
と^{三二}
と^{三三}
と^{三四}
と^{三五}
と^{三六}
と^{三七}
と^{三八}
と^{三九}
と^{四〇}
と^{四一}
と^{四二}
と^{四三}
と^{四四}
と^{四五}
と^{四六}
と^{四七}
と^{四八}
と^{四九}
と^{五〇}
と^{五一}
と^{五二}
と^{五三}
と^{五四}
と^{五五}
と^{五六}
と^{五七}
と^{五八}
と^{五九}
と^{六〇}
と^{六一}
と^{六二}
と^{六三}
と^{六四}
と^{六五}
と^{六六}
と^{六七}
と^{六八}
と^{六九}
と^{七〇}
と^{七一}
と^{七二}
と^{七三}
と^{七四}
と^{七五}
と^{七六}
と^{七七}
と^{七八}
と^{七九}
と^{八〇}
と^{八一}
と^{八二}
と^{八三}
と^{八四}
と^{八五}
と^{八六}
と^{八七}
と^{八八}
と^{八九}
と^{九〇}
と^{九一}
と^{九二}
と^{九三}
と^{九四}
と^{九五}
と^{九六}
と^{九七}
と^{九八}
と^{九九}
と^{一〇〇}

月出つと見えて
（文部省「岩案」）

合などに用ひる。

(注意) ○受け止めるとは、又名詞として用ひた語や句などにも附く。

次の例を見よ。

これを買ふと決めよう。まだ夜が明けないと見える。「いそがばまはれ」といふ諺がある。

へ へは「前へ進め」後へ「下れ」のやうに、動作の方向を示すに用ひる。

(注意) ○にとへとは區別して用ひなければならぬ。「東京へ行く」といへば東京の方へ向うて行く意、東京に著くといへば東京の地に到着した意である。へはほんやりと方向を指し、にはは「さりと位置を示す。

から からは「東京から行く」、「二階から目薬」のやうに、動作の起る基點を示すに用ひる。

(注意) ○からは文語のよりにあたる。

○からは又名詞として用ひた語の下にもつく。次の例を見よ。

口語「へ」イ「エ」
トイ「傾め」
ニト「区別」

口語「へ」イ「エ」
トイ「傾め」
ニト「区別」

六河「ニ」

まで

遠くからでも見える。

までは「京都まで歸る」、「十時まで勉強する」のやうに、動作の終局する點を示すに用ひる。

(注意) ○までは、用言の連體段實は名詞が省略されてゐるのである。又は名詞として用ひた語の下につくことがある。次の例を見よ。

日の暮れる頃まで仕事をす。

批難されぬ程度までに整理した。

より よりは「父母の恩は山より高い」、「あれはこれより美しい」のやうに、比較の標準を示すに用ひる。

(注意) ○比較のよりは、文語も口語も同様である。

○よりは、又名詞として用ひた語の下につく。次の例を見よ。
習ふより慣れよ。死ぬよりまだ。

○このよりにか又はは、もなどを添へていふこともある。次の例を見よ。
氷よりか冷たい。氷よりは冷たい。氷よりも冷たい。

より

て

ては、筆で字を書く、鉛筆で線をひくのやうに、下の用言の意味を限定するに用ひる。

(注意) ては、にての約ま、たものでにては、に因つてに就いてに於いてなどの「因」「就」「於」を省略したものである。

○指定の助動詞にもてがあるし、又他にもて(九十九頁注意の條を見よ)がある。混同してはならぬ。

やは、桃や、梨を食ふ、本や、筆や、墨を買ふのやうに、物事を並列する意を示すに用ひる。

(注意) ○やは、物事のまだ外にもある意を示す。この點が、とちがふ。次の例を見よ。

本と筆を買ふ。(本と筆とだけ買って、他には何も買はぬ場合にいふ)

本や筆を買ふ。(本や筆などを買ふ。他にもまだ何か買ふかも知れぬ場合にいふ)

や

だの

種類の語につく助詞

は

だのは、犬だの、猫だのを畜ふのやうに、物事を並列する意を示す。

○最後の體言の下には、やをつけぬ。

○文語には疑問のやといふがあるが、口語にはない。

○このやと感動詞のやとを混同してはならぬ。

だのは、大體やと同じ意味に用ひる。但し、だのはいつても語ごとにつけて、やのやうに最後のものを省かぬ。この點がやとちがふ。

種類の語につく助詞 此の類の助詞は、は、(ば)も、(さ)へ、かものか、こそ、ばかり、ほど、だけ、なり、やら、な、などである。今その用法のあらましを次に述べよう。

はは、墨は黒く、雪は白いのやうに物事を區別する意

に用ひ、又「よくはわからん」「容易には出来ん」のやうに、多くの物事の中からある物事を取り出して説明する意に用ひる。

ははまた「行きはしたが、間に合はなかつた」「馬に蹴られはしたが、怪我はしなかつた」のやうに、動詞、助動詞の連用段につき、さ行變格の動詞につづけて、ある動作を取り出して説明する意に用ひ、或は、「行きはいつたが、間に合はなかつた」「蹴られは蹴られたが、怪我はしなかつた」のやうに、動詞、助動詞の連用段につき、同じ動詞を重用して、特にその動作を説明する意に用ひる。但し、この時には、いつも反對の意を有するが、「けれども」などの語が下に添はつて、事の豫期に反した事を示す。

ば

(注意) 〇をの下につくは、「行くをば送り来るをば迎ふ」のやうに、「ばと濁る」。但し通例の場合には、この「を」を省いて「行くは送り来るは迎ふ」のやうにいふ。

〇この「ば」を、「風が吹けば花が散る」など、本来濁音の「ば」と混同してはならぬ。

も

もは、「鳥も啼き、蟲も鳴く」「高くも安くもない」「野にも山にも咲く」のやうに、物事を並列するに用ひる。

もはまた、「読みも書きもした」「褒められも、叱られもする」のやうに、動詞、助動詞の連用段につき、下に「さ行變格の動詞」

を續けて、動作を並列するに用ひ、又「知りもせんことを知つたらしういふ」「讀まれもせん本を買ふ」「をかしくもないことを笑ふ」のやうに、ある事項の意味を強めていふに用ひる。

ても

その外もは食ひも食つたが、飲みも飲んだ、「叱られも叱られたが、悪い事もした」、「高いも高いが、良いも良いのやうに、動詞、助動詞の連用段、形容詞の終止段に付き、同じ用言を重用して、動作や有様を勢強くいふにも用ひる。

でも てもは「一念の力は岩でも透す」、「品は少しでも、情は深い」、「天にでも昇る勢のやうに、多くの物事の中からある物事を舉げて、その他を類推させる意を示すに用ひる。

でもはまた、「君になら言ひでもする」、「馬に蹴られてもしては馬鹿馬鹿しい」などのやうに、動詞、助動詞の連用段に添うて、さ行變格の動詞につづく。さうして、ある動作を舉げてその他を類推させる意を示す。

さへ

さへは、「一椀の茶さへ飲まぬ」、「兩親にさへ話さぬ」

か

のやうに、ある事物を舉げて他を類推させる意に用ひ、又は「麵包さへあれば、命は繋げる」、「親にさへ告げればよい」のやうに、ある事物に重きを置いて、その他を顧みぬ意を示すに用ひる。

さへは又、意味が分りさへすればよい、「もう庭を掃かせさへすればよい」のやうに、ある動作に重きを置いて、其の他を顧みぬ意を示すに用ひることがある。但し、この場合には、動詞、助動詞の連用段について、さ行變格の動詞に續ける。

(注意)〇「鳥てさへ孝を知つて居る」のてさへも、亦さへと同じ意味である。

か かは、「これかそれか」を買はう、「行くか行かぬか」を決めよう、「何とかかとかいふ」のやうに、ある物事を並列して、其

の中のどれかが不明である意を示すに用ひる。

(注意)〇誰か読んでごらんなど疑の語の下につくかは、多くの物事の中のどれかが不明である意を示すに用ひる。

かは又「まだ風が吹いて居るか」「もう雨は止んだか」「これとそれと、どちらが美しいか」のやうに、動詞、助動詞(指定助動詞だには附かぬ)、形容詞の終止段に附いて、問ひかける意を示すに用ひる。

かは又「こんな小失敗に落膽してよからうか」「私がどうしてお前を遠ざけようか」のやうに、推量助動詞「う、よう」の下について、反語となる。

ものか ものかは「あの人、うそをいふものか」「こんなまづいものが、食べられるものか」のやうに、動詞、助動詞の連

ものか

體段(但し、過去の助動詞たの下にはつかぬ) について、反語となる。

(注意)〇ものかは又ものですかともいふ。

こそ こそは「あなたこそお仕合せものだ」「ようこそお出で下さいました」「感心したればこそ、お褒め申すのです」のやうに、意味を強めて物事を言ひ表はすに用ひ、又は「食ひこそするが、まづい」「やめさせこそせんが、信任はしてゐない」のやうに、動詞、助動詞の連用段について、強く動作を言ひ表はすに用ひる。

(注意)〇文語では、こそが文の中にあるときには、その末を用言の已然段で結ぶのが規則であるが、口語では、そんな規則はない。

ばかり ばかりは「うそばかりいふ」「風が吹くばかりで、雨は降らぬ」「美しいばかりで、外に取り所がない」のやうに、物

ばかり

こそ

事の一つしかないことを示すに用ひる。

〔注意〕〇ばかりは、又ばかりともいふ。

地方によっては、ばかりを訛ってばかりし、ばかりなどともいふ。併し、これらは正しい語ではない。

ほど

ほど ほどは「日本ほどよい國はない」「勉強すればするほどおもしろい」「人に笑はれるほどつらいことはない」「ひもじいほど苦しいものはない」のやうに、體言又は用言の連體段につづいて、程度を示すに用ひる。

だけ

だけ だけは「今日は五日だけ出勤した」「言へば言ふだけ不利です」「人に笑はれるだけで、何の効もない」「勉強の出来ぬのがつらいだけ」のやうに、體言又は用言の連體段につづいて、物事の際限を示すに用ひる。

なり

なり なりは「筆なり、墨なり、買ふ」「見るなり、聞くなりして覺える」「下女になり、下男になり、聞くがよい」のやうに、體言又は用言の連體段などについて、物事を並列して、その中の一つを選ばせる意を示すに用ひる。

やら

やら やらは「日曜日やら祭日やらで賑かだ」「飲むやら食ふやら」「嬉しいやら、悲しいやら」のやうに、體言又は用言の連體段について、「あれや、これや」の意を示すに用ひる。

な

な なのは「泣くな」「人に笑はれるな」のやうに、動詞及び助動詞(受身、使役及び尊敬)の連體段について、禁止の意を示すに用ひる。

3

用言につく助詞

用言につく助詞 この類の助詞は、ば、と、ながら、たり、なら、

ものなら、から、ので、て、し、が、ても、も、けれども、に、の、に、もの、ものを、など、である。此の類の助詞は主に上の文と下の文とを接續するに用ひる。

ば ばは「風が吹けば、花が散らう」「人に褒められれば、嬉し
いてせう」「うまければ、澤山おあがり下さい」のやうに、動詞

助動詞、形容詞の假定段に附いて、ある事柄を假定する意を示すに用ひる。

ばは又「學問すればこそ、えらい人になれるのだ」「良い醫者にかかつたればこそ、全快したのです」のやうに、動詞、助動詞の假定段について、てすからの意を強く示すに用ひる。但し、この場合には、下にこそといふ語を添へる。

ばは又「本も讀めば、字も書く」「馬にも蹴られれば、牛にもつ

と

かれる」「丈も高ければ、肉づきもよい」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の假定段に附いて、一つの事柄に他の事柄を取り添へる意を示すに用ひる。

(注意) このばを區別のはが音便で濁ったばと混同してはならぬ。

と とは「風が吹くと、花が散る」「人に譏られると、悔しい」「雨が降が長いと、洪水の恐れがある」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段について、ある事柄を假定するに用ひる。但し、推量、希望、過去、未來の四つの助動詞には附かぬ。

とは又「家に歸ると、日が暮れた」「先生が教室に來られると、すぐ授業が始まった」「車夫を迎にゆかせると、入り違ひにお客が來た」のやうに、動詞又は助動詞(受身、使役、尊敬)の終止段に附いて、或る事柄と他の事柄とが、同時に起る意を示す

ながら

に用ひる。

(注意)〇このとを體言につくと混同してはならぬ。

ながら ながらは「景色を見ながらあるく」「斬られながら逃げる」のやうに、動詞、助動詞の連用段に附いて、同時に起る動作を示すに用ひ、又「教育の大切な事を知りながら、教育に盡力せぬ」「毎日人に笑はれながら、一向氣にかけぬ」のやうに、動詞、助動詞の連用段に附いて、上の條件と下の條件との一致せぬことを示すに用ひる。

(注意)〇このながらを、接尾語のながらと混同してはならぬ。

たり

たり たりは「見たり聞いたりする」「褒められたり叱られたりした」のやうに、動作の反復して行はれることを示すに用ひる。但し、此の場合には、動詞、助動詞の連用段につ

なら

いて、二つの事柄を並列し、下をさ行變格活用の動詞につづける。

なら ならは「書かうと思ふなら、書け」「取られるなら、取つて見よ」「してもよいなら、しよう」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の連體段について、ある事柄を假定する意に用ひる。

(注意)〇時としては、「思ふのなら」「よいのなら」のやうに、のを冠らせて用ひることもある。又「思ふならば」のやうに、ばを添へていふこともある。

〇このならばをなればといふこともある。

〇このならば、又「あれならよからう」、「あの人になら話してもよいのやうに、用言以外の語に附けることもある。

ものなら

ものなら ものならは、「うたれるものなら、うって見よ」のやうに、可能の助動詞の連體段について、「されるはずのない動作が、もしされるならば」の意を示すに用ひ、又は「人の

の^{から}て

物でも盗まうものなら、どんなに叱られるか知れない、喧嘩でもしようものなら、すぐまけてしまふのやうに、未來の助動詞「う」の下に附いて、すべからざることを若ししたならばの意を示すに用ひる。

からのて からは、僕も行くから、君も行け、日が暮れたから、戸を閉ぢる、寒いから、重ね著をするのやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段に付き、のでは、毎日雨が降るので困る、天氣になつたので、外出した、氣候が順當でないので、病人が多いのやうに、動詞、助動詞、形容詞の連體段に附く。そして、或事柄が他の事柄の原因となる意を示すに用ひる。ては「風が吹いて、花を散らす、叱られて泣く、苦しくてたまらん」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の連用段に附いて、

て

事の由來を示すに用ひ、又、雲が晴れて、月が輝く、この家は廣くて、大きい」のやうに、ある事柄に他の事柄を取り添へる意を示すに用ひる。

（注意）〇ては完了助動詞の連用段が轉じて助詞となつたのである。

〇このてが、四段活用の動詞の連用段磨ぎが行、死に（な）行、飛びは行、讀み（ま）行などにつづくと濁つててとなることは、前に動詞の音便のところていつた通りである。

し

しは、學識もあるし、徳望もある、馬には蹴られるし、牛には衝かれるし、ひどい目にあつた、品行も正しいし、學力も高いのやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段に附いて、ある事柄に他の事柄を取り添へる意を示すに用ひる。しはまた、土人形ではあるまいし、雨ぐらゐを恐れてはならん」のやうに、打消のまいにつづいて、ある事柄と他の事

が

柄と一致せぬことを示すに用ひる。
 が 雨が降るが、風は吹かぬ、風は吹かぬが、雨は降る、
 「品行はよいが、學力はよくない」のやうに、動詞、助動詞、形容
 詞の終止段について、ある事柄が他の事柄と一致せぬ意
 を示すに用ひ、又、高からうが、安からうが、構はぬのやうに、
 推量の助動詞の終止段について、意味の反對した二つの
 事柄が、いづれも他の事柄と一致せぬ意を示すに用ひる。
 がは又、學才もあるが、徳望もある、「風も吹いたが、雨も降
 った」この山はたいそう高いが、一體、何といふ山だらう
 のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段について、單にある
 事柄と他の事柄とを接續するに用ひる。

（注意）このがを主格の體言につくがと混同してはならぬ。

ても

ても てもは、問うても言ふまい、「尋ねられても答へぬ」い
 くら行儀がよくてもだめだのやうに、動詞、助動詞、形容詞
 の連用段について、上下の條件の一致せぬことを示す。

（注意）このてもが四段活用の動詞の語尾ぎに、びみの音便いんの下に
 つくときには、剃いても、死んでも、飛んでも、讀んでものやうにても
 と濁る。これを本來濁音のてもと混同してはならぬ。

もは「家は貧乏でも、慈悲心は深い」のやうに、指定の助
 動詞の連用段(中止)で、上の條件と下の條件との
 一致せぬことを示すに用ひる。

（注意）このもを體言につくもと混同してはならぬ。

けれども

けれども けれどもは「風は吹くけれども、寒くない」、「梅
 は咲いたけれども、鶯はまだ來て鳴かぬ」、「行狀は正しくな
 いけれども、學力はある」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終

藤谷毛吉

トウフ人の研究トテ
カウジ一研究カ出草
ラ居テ

分類、大抵博士

卓見

及(等詞也)
体言(準体言)

用(助詞)

忠告 忠告は、あつて、
見え ない。
早く 來れば、よいものを、いつまでも待
つても 來ぬ。

のに

ものもの
ものを

止段について、上の條件と下の條件との一致せぬことを示すに用ひる。

に、のに にも亦「厚著をして居るに」のに、まだ寒い、「あ

れほど忠告したに」のに、まだ改めぬ、「早く改めればよいに」

のに、一向改めない」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段について、上下の条件の一致せぬことを示すに用ひる。

(注意)このにを體言につくに混同してはならぬ。

右の外ものものをは、

寒い とはいふもの、さすがに 春だ。

忠告 はしたものの、一向 ききめ が

見え ない。

早く 來れば、よいものを、いつ までも 待

つても 來ぬ。

今令々

格

格(と)格止

練習
格(と)格止
格(と)格止
格(と)格止

のやうに、用言の連體段について、どちらも上の條件と下の條件との一致せぬことを示すに用ひる。

次の文の中の助詞を指摘せよ。

1. 僕があれほどにいふのに、少しも聞かないとは、あんまりなことだ。

2. 今日、雨も降るし、風も吹くから、散歩をやめよう。

3. みめ形がよくても、心ざまが正しくなければ、善い人とはいはれない。

4. 風でもひかせると、どんなにしかられるかわからな。

5. 角力はたびたび見たけれども、芝居は一度もみたことがない。

第八章 副詞

第一節 副詞の意義

ゆつくり あるく。

あ の 山 は ずいぶん 高い。

右のゆつくりは動詞あるくに副ひ、ずいぶんは形容詞高

副詞

いに副うて、それぞれ、その意味を限定してゐる。かやうに、動詞、形容詞などに副うてその意味を限定する詞を副詞といふ。

第二節 副詞の用法

副詞は、又

たいそう そろそろ あるく。

なかなか りっぱに 出来た。

のたいそう、なかなかのやうに、他の副詞の意味を限定することがある。又、

いっかう 悲しんで 居る 様子 は ない。

まことに 申し譯 の ない 御無沙汰 を し

ました。

副詞、形容詞

形容詞

形容詞

形容詞

文章

句

文法

のいっかうまことにのやうに、幾つかの語を隔てて、下の動詞や形容詞の意味を限定することがある。

右の外、副詞は、動詞、形容詞又は副詞の用をする句に副うてその意味を限定することもある。次の例を見よ。

決して 運動に 耽つて は ならぬ。

唯 半日の 路 だ。

わづかに、一ヤードの 差 で、白 の 勝利

と なつ た

即ち、決しては動詞の用を爲す句耽つてはならぬの意味を限定し、唯は形容詞の用を爲す句「半日の」の意味を限定し、わづかには副詞の用を爲す句「一ヤードの差で」の意味を限定して居る。

副詞の構成

副詞には本來のものもあり、名詞、形容詞から轉成したものもある。又種種の詞が結び合つて出來て居るものもある。今一二の例を次に擧げよう。

今日 行かう か、いや、明日 ゆかう。

早く 出來 た もの は、こはれ やすい。

大砲 の 音 が、盛んに 聞こえる。

やつとの ことで、敵 に うち勝つ た。

右の今日、明日は、名詞の副詞に轉じたもの、早くは、形容詞の連用段の副詞に轉じたもの、盛んには、動詞の連用段の名詞に轉じたもの、か、いや、明日、ゆか、うの、やつとの ことでは、副詞、かつと、助詞、名詞、こと、助詞で、敵、に、うち勝、つ、たの、たが相合して一の副詞となつたのである。

加内新吉、何、調、
え、事、
朝、あ、か、百、
改、
改、
改、
改、

練習

次の文の中の副詞を指摘せよ。

(注意) 〇副詞には、又、びか びか ざあ ざあ ごろ ごろ なる などのやうに、語を重ねたものが多い。

1. ぜい、お目にかかりたいことがありますから、どうぞ、御在宅の日と時間とお知らせ下さう。
2. 風がざあざあ吹いて、雨がばらばら落ちて來たので、群集が、たいそう混雜した。
3. しばらく、お心をおしづめ あそば されて、私の申すことをよくお聞き下さう。
4. 先日計畫したことは、おほかた見込通りにいったが、見込の外れたことも、少しあった。
5. 一旦思ひ立ったことは、たとひどんな故障が起つても、決して中途にやめてはならぬ。

呼、
決、
よ、
ア、
多、
分、
一、
一、
一、
一、

い、
の、
ま、
ま、
ま、
ま、
ま、
ま、
ま、

第九章 接續詞

第一節 接續詞の意義

筆 または ペン。
 本 を 読み、あるひは 字 を 書く。
 猫 は 鼠 を 捕る。それゆゑ、人家 に 畜
 は れる。

接續詞

右のまたは、あるひは、それゆゑは、語や文などを接續するに用ひる。よつてこれを接續詞といふ。

第二節 接續詞の種類及び用法

接續詞には、單に多くのものを累加する場合に用ひるもの、物事を選択する場合に用ひるもの、上文の事柄と下文の事柄との一致する場合に用ひるもの、及びその相反對

テ、ソ、ト、下、ニ、同
 二、同、係、る
 持、續、詞、の、ミ、ニ、レ
 か、ち、

事物を累加する場
合に用ひ
る接續詞

する場合に用ひるものなどがある。今その重なるもの
 の用例を次に述べよう。
 一、物事を累加する場合に用ひるもの また、かつ、および、
 それに、さうしてなどは、これに屬する。次の例を見よ。

また……山 また 山 を 越え て 行く。
 かつ……本 を 読み、かつ 字 を 書く。
 および……米 麥 豆 粟 および 豆 を 五穀
 と いふ。
 それに……風 も 吹いた、それに 雨 も 降
 った。
 さうして……これ から 字 を 書かう。さう
 して 先生 に見て もらはう。

累加の接續詞
 ト、イ、フ、人、ア、リ

(選擇的)

事物を選擇する場
合に用ひる
接續詞

(注意)〇このさうしては、約めてそしてともいふ。

二、物事を選択する場合に用ひるもの またはあるひは、
もしくはなどは、これに屬する。次の例を見よ。

または…人力車 または 電車 て 行く。

あるひは…學問 あるひは 商業 て 身を

立て よう。

もしくはは…姉 もしくは 妹 に 話さ う。

三、上文と下文どが一致する場合に用ひるもの それで、

それゆゑ、それですから、それだから、それでは、それならな
どはこの類に屬する。次の例を見よ。

それで…昨日 雨 が 降つ た、それで 學校
を 休ん だ。

カクハナシ

(背反的)

上文と下
文とが一
致する場
合に用ひ
る接續詞

(注意)〇それゆゑ、それですから、それだからは皆、それでと同じ意に用ひ
る。よつて、ここにはその用例を省く。

〇それでのそれを略しててといふことがある。又、それですから、そ
れだからのそれを略しててすから、だからといふこともある。

それでは…御不在 です か、それでは、又 後

日 うかがひ ませ う。

(注意)〇それならばそれではと同じ意味に用ひる 故にここにはその
用例を省く。

〇それならばそんならともいふ。又、それではのそれを略しててはと
いふこともある。

そこで…始業 の 鐘 が 鳴つ た。そこで

教室 へ 出かけ た。

(注意)〇さうするとするとさうしたらなども亦此の類の接續詞である。

四、上文と下文どが一致せぬ場合に用ひるもの それで

(背反的)

カクハナシ

上文と下
文と一致
せぬ場合
に用ひる
接續詞

すけれども、それですが、それなのに、それでもなどは、皆これに属する。次の例を見よ。

それですけれども…あの人は道徳家
です。それですけれども 學問はあり
ません。

(注意) ○それですが、それだけれども、それだがなどは、皆それですけれどもと同じ意味に用ひる接續詞である。

○それですけれども、それだけれども、それですが、それだがは、略して、ですけれども、だけれども、です、だがなどもいふ。

それなのに：夜が明けた。それなのに、起
きようともしない。

○それですのにも、亦それなのにと同じ意味に用ひる接續詞である。
(注意) ○それですのに、それだのには、略してそれのに、それにともいふ。

形、分、方
上、ニ、ク、マ、ロ
中、ニ、キ、ム、ソ、ノ
及、並、轉、成、接、續、詞
つ、い、て、随、つ、て

練習

次の文の接續詞を指摘せよ。

- それでも、しかしなど、亦この類の接續詞である。
- 1. 明日はお伺ひ申します。 もっとも、雨天でしたら、缺禮いたします。
- 2. 私は昨日新橋へいきました。 それから、汽車に乗って横濱へ参りました。
- 3. 今日は雨が降るでせうか、それとも、風が吹くでせうか。
- 4. 彼れは學識もあり、その上徳望もあって、中々當世に得難い人物です。
- 5. 鳥獸でも恩を知って居る。 まして人間たるものが恩を忘れてよからうか。

第十章 感動詞

第一節 感動詞の意義

ああ、うれしい。
おや、そうでしたかね。
どれ、ゆかろうよ。

感動詞

さあ こまっ た 事 が 出来 た。
右のああ、おや、ね、どれ、よ、さあなどは、物に感動したとき自然に發する語である。よってこれを感動詞といふ。

第二節 感動詞の種類及び用法

獨立感動詞
附屬感動詞

感動詞には、文の首部につくものと、語句の中や終につくものとある。甲を獨立感動詞といひ、乙を附屬感動詞といふ。

獨立感動詞のおもなるものは、上例のああ、どれ、おやの外に、

あれ ござらん なさい。
それ 大變 だ。
やあ しまつ た。

やれ やれ、くたびれ た。
まあ、どう したら よから う。
もし、もし、あなた は どなた ですか。

のあれ、それ、やあ、やれ、まあ、もしなどである。この他、あらいえい、や、えい、おい、これ(こりや)、さあ、それ(そりや)、はい、はて、ほら、やい、やつなども、亦皆これに屬する。

附屬感動詞のおもなるものは、上例のよ、ねの外、

實に 愉快 だ な(なあ)。
坊 や、ここ へ おいで。
來 た ぞ、來 た ぞ。

のな(なあ)、や、ぞなどである。

次の文の中の感動詞を指摘せよ。

練習

語の構成

1. さあさあ、おあがりくださいまし。
2. 元日や、きのふの鬼が禮にくる。
3. この後は、一層勉強しなくてはいかんぜ。
4. それは勿論のことさ。
5. さてさて、けなげな振舞だなあ。
6. おちい、船頭さん、やあい。
7. あら、とんでもない事をあつしるは。

第十一章 語の構成

単純な語が、二つ以上集まつて、更に一語を作ることゝ語の構成といふ。語の構成法に、疊語法、熟語法、接頭語法、及び接尾語法の四通りある。今次にこれを述べよう。

第一節 疊語法

疊語

木木の梢に、色色の花が咲く。
 われわれは、日本帝國の臣民だ。
 女女しい振舞や、輕輕しい振舞をし
 てはならぬ。
 ゆめゆめ、此のことを忘れるな。
 おやおや、驚いたね。

右の木木、色色、われわれ、ゆめゆめ、おやおやは、同じ語が重なつて一語となつたもので、女女しい、輕輕しいは、同じ語が重なつて、これに形容詞の語尾が添うて一語となつたものである。かやうな語を疊語といひ、かやうな語の構成法を疊語法といふ。

疊語には、名詞、代名詞、形容詞、副詞及び感動詞の五通りあ

る。前例の木木、色色を始め、山山、川川などは疊語の名詞、われわれを始め、だれだれ、どれどれなどは疊語の代名詞、女しい、輕輕しいを始め、雄雄しい、なれなれしい、重重的しい、うやうやしいなどは疊語の形容詞、ゆめゆめを始め、時時、口口に、一人一人、見る見る、おひおひにはやばや、しみじみと、なほなほ、はるばるなどは疊語の副詞、おやおやを始め、あれあれ、まあまあなどは疊語の感動詞である。

第二節 熟語法

秋風 が、身 に しむ。
朝起 は、一家 の 榮える もと て ある。
あちらこちらの 敵 の 要塞 を みな
おとしいれた。

熟語

薄暗い 處 に 育つ た 草木 の 葉 の
色 は、青白い。
今更に、昔 が 思ひ出さ れる。
大粒 の 雨 が、ばらばらと 降り出した。
あ の 人 は 金満家 て ある。それだけ
ども、吝嗇 て ある。
右の秋風、朝起、一家、要塞、あちらこちら、おとしいれ、薄暗い、
草木、青白い、今更に、思ひ出さ、大粒、ばらばらと、降り出し、金
満家、それだけでも、二つ以上の異なる語が合して一
語となつてゐる。かやうな語を熟語といひ、かやうな語
の構成法を熟語法といふ。
熟語には、名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、及び接續詞の六通

りある。前例の秋風、朝起、一家、要塞、草木、金満家を始め、織物、赤子、高笑、足弱、書き取り、善し悪しなどは熟語の名詞、あちらこちらを始め、そこそこ、だれそれなどは熟語の代名詞、薄暗い、青白いをはじめ、心易い、恐れ多いなどは熟語の形容詞、今更にをはじめ、朝夕、絶えず、例へばなどは熟語の副詞、それだけでもを始め、それなら、それだがなどは熟語の語の接續詞である。

數語が相合して熟語を作るときは、時としてもとの音を變へることがある。今その大要を次に述べよう。

連濁

一、連濁 連濁とは、熟語となるために、次の語の頭の音の濁ることをいふ。「いしはし(石橋)…いしばし、ものかたる(物語)…ものがたる、うすくらしい(薄暗い)…うすぐらしいなど

は、皆この例である。

二、轉音 轉音とは、熟語となるために、上の語の末の音が他の音に轉ずることをいふ。「あめと(雨戸)…あまど、「くちわ(口輪轡)…くつわなどは、皆この例である。

三、約音 約音とは、熟語となるために、二音が約まつて一音となることをいふ。「あのかた(彼の方)…あなた、「さしあげる(さし上げる)…ささげる(捧げる)などは、皆この例である。

四、省音 省音とは、熟語となるために、ある音が全く失せることをいふ。「かへるて(蛙手)…かへて(楓)、「ふみばこ(文箱)…ふばこなどは、皆この例である。

五、加音 加音とは、熟語となるために、ある音の新に加はることをいふ。「やか(八日)…やうか、「むか(六日)…むいかな

加音

省音

約音

轉音

どは、皆この例である。

第三節 接頭語法

はつ雪が、お庭に つもつ た。

敵の 兵士 が、あちこちに さまよふ。

か弱い 人 ても、たやすく 行ふ こと が

出来る。

右のはつ雪、お庭さまよふ、か弱い、たやすくなどは、雪庭、まよふ、弱い、やしくなどいふ語の頭に、ある獨立しない語の添うたものである。この添うて居る語を接頭語といひ、かやうな語の構成法を接頭語法といふ。まつ白、す肌、き酒、うち喜ぶ、もてはやす、け高いなどのまつ、す、き、うちもてけなども、亦、皆接頭語である。

接頭語

第四節 接尾語法

皆さん、どうか 人間らしい 人間 に おなり

なさい。

重砲 は、重さ が 何斤ぐらゐ あり ます

か。

春めい た から、近日、友人 を 尋ね よう。

右の文例について、皆さん、人間らしい、重さ、何斤ぐらゐ、春めいなどいふ語は、皆、人間、重、何斤、春、などいふ語の末に、ある獨立しない語が添うたものである。この添うて居る語を接尾語といひ、かやうな語の構成法を接尾語法といふ。あなたがた、おまへたち、子供衆、私ども、かれら、厚み、細め、學者ぶる、黄ばむ、薄らぐ、うれしが、る、おこがましいなど

接尾語

練習

のがた、たち、衆、ども、ら、み、め、ぶ、る、ば、む、ら、ぐ、が、る、が、ま、し、い、な
ども、亦皆接尾語である。

次の文の中の單柱を施した語の構成を説明せよ。

1. 犬どもが、兎を高みに追ひ上げた。
2. 子子孫孫の末まで、大君の御恩を忘れてはならん。
3. 悪人には遠ざかり、善人には近づくやうにせねばならん。
4. 昨日、書生連と一緒に、家を何町何番地に引き越した。
5. 敷島の大和心とはどんなものかと問ふ人があつたら、私は朝日に匂ふ山櫻花のやうなものだと答へよう。

次の轉音、約音、連濁、省音を説明せよ。

- つまごと(爪琴)　こがらし(木枯)　あかし(明石)
あじろ(網代)　くすし(薬師)　たなごころ(掌)

第十二章 品詞の解剖

品詞の解剖

文又は語句をそれぞれの品詞に分解することを品詞の解剖といふ。

品詞の解剖に二種の方法がある。甲はただ品詞の九種を區別する方法で、乙は更にこれを小さく區別する方法である。例へば「花が立派に咲いた」を

花^名が^助立派^副に^助咲^動いた^{助動}を

のやうに解剖するのは甲の方法で、

花^名 普通名詞。

が^助 助詞。體言に添ふもの。

立派^副に^助 副詞。熟語。

咲^動いた^{助動} 動詞。か行四段。(咲きの音便) 自動詞。連用段。

た^{助動} 助動詞。過去。終止段。

のやうに細かく解剖するのは乙の方法である。次の文を乙の方法によつて解剖せよ。

三十四年 高野鶴三郎
日本文典
主語(後)の注
トテラ 説明の中心物

二十九年 大槻文彦
中野初太郎 著
文の成分

三十二年 日島 存
主語(後)の注
説明語

三十四年 日本文法
補足語
客語
三十四年 日本文法
補足語
客語

練習

第一章 文の成分

1. 私は、酒も煙草も嫌ひです。
2. 昨夜は、五時から十時まで勉強しました。
3. 明日は早く起きよう。そして、復習をしよう。
4. あの人は悪口をいはれても、少しも怒りません。
5. おや、鐘が鳴って居る。火事は何處だらう。

第二篇 文

第一章 文の成分

文を組み立てて居る語を、その職分の上から見ると、自然に數種にわかれる。これを文の成分といふ。今次にこれを説明しよう

一、主語、説明語 話の題目となる語を主語といひ、主語を説明する語を説明語といふ。例へば、「花が咲く、山が高い」の二つの文の中で、咲く、高いは花又は山について説明す

る語であるから説明語、花が、山がは話の題目となる語であるから主語である。

(注意文は、少なくとも主語と説明語とを備へて居なければならぬ)

二、客語 動作の目的を示す語を客語といふ。例へば、「猫が鼠を捕る」、「農夫が稻を刈る」の文の中で、猫が、農夫がは主語で、捕る、刈るは説明語である。然るに、この捕る、刈るは他動詞であるから、猫が捕る「農夫が刈る」だけでは意味が分らない。どうあつても、鼠を、稻ををなどいふ語を加へる必要がある。この鼠を、稻ををは即ち客語である。

三、補足語 主語、客語又は説明語の外の語で、文意を全うする上に必要な語を補足語といふ。例へば、「秀吉が、關白となつた」、「頼朝が、義經に逢つた」の二つの文の中で、秀

補足語

客語

三十一 三四年 日本文典
中野初太郎 著
補足語
客語

三十四年 日本文典
補足語
客語

三三三 同法
初尋の文典

第一章 文の成分

三三三 同法
三三三 同法
三三三 同法
三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

三三三 同法

吉が頼朝がは主語、なつた、逢つたは説明語である。しかし秀吉がなつた、頼朝が逢つたでは意味が分らない。必ず、關白と、義經になどの語を加へなければならぬ。然るに、關白、義經は動詞の目的即ち客語ではなくて、説明語なつた、逢つたの意味の不十分なところを補ふ語である。故に補足語である。又、艱難は人を玉にする、落武者が、芒を人と思ふの二つの文の中で、艱難は落武者がは主語人を、芒をは客語する、思ふは説明語である。しかし、艱難は人をする、落武者が芒を思ふといっただけでは、意味が分らない。必ず、玉に、人などいふ語を加へなければならぬ。然るに、玉に、人とは他動詞の説明語する、思ふの目的即ち客語ではなくて、する、思ふの意味の不十分なところを補ふ語である。故に、これもまた補足語である。

(注意) ○形容詞又は指定の助動詞を説明語として居る文にも、補足語を要することがある。次の例を見よ。

甲は、乙に等しい。 心は白絲と同じやうである。
 富士川は急流です。 おれは、おれだ。

○主語は、大むねが、はなどの助詞に伴ひ、客語は、多くをの助詞に伴ふ。又、補足語は、多くに、又はとの助詞に伴ふ。

但し、主語にても、さへばかり、こそなどの助詞がつくこともあり、客語のをが省略されることもある。又、補足語にを、へ、から、より、までなどの助詞がつくこともある。

るを補ふ語である。故に、これもまた補足語である。

(注意) ○形容詞又は指定の助動詞を説明語として居る文にも、補足語を要することがある。次の例を見よ。

甲は、乙に等しい。 心は白絲と同じやうである。
 富士川は急流です。 おれは、おれだ。

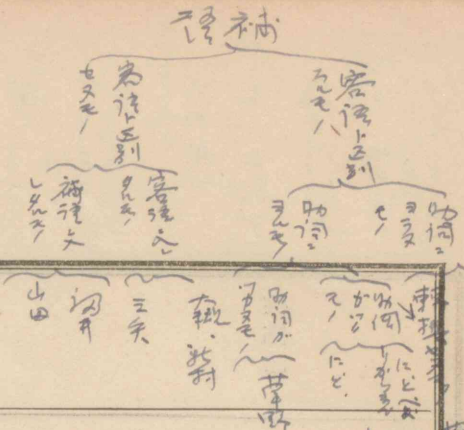
○主語は、大むねが、はなどの助詞に伴ひ、客語は、多くをの助詞に伴ふ。又、補足語は、多くに、又はとの助詞に伴ふ。

但し、主語にても、さへばかり、こそなどの助詞がつくこともあり、客語のをが省略されることもある。又、補足語にを、へ、から、より、までなどの助詞がつくこともある。

四、修飾語 文の意味をくはしくするため、主語、客語、補足語および説明語に附け加へる語をすべて修飾語といふ。例へば、白い犬が走る、「母が泣く、兒に乳を吞ませる。」

修飾語

第一章 文の成分



「春風が桜の花を散らす」などの文で、白いは主語、犬にかかり、泣くは補足語、兒にかかり、櫻のは客語、花にかかり、つて、それぞれ、その意味を限定して居る。故に、いづれも修飾語である。

又「雨がはげしう降る」、「私は、大層、あの人に敬服して居る」の文の中で、はげしうは、すぐ下の説明語降るにかかり、大層は、補足語を隔てて、説明語敬服して居るにかかり、その意味を限定して居る。それゆゑ、これらも亦修飾語である。

(注意) 〇主語、客語、補足語の修飾語となるものは、多くは連體段の用言か、體言にののついた句かである。而して、説明語の修飾語となるものは、多くは副詞である。

文の成分は、主語、客語、補足語、説明語、およびそれぞれの修飾語である。

練習

次の文を各成分に分解せよ。

1. 活潑な精神は、健康な身體に宿る。
2. ポートの進水式は、昨日隅田川で行はれた。
3. 教師が、生徒に、算術の宿題を課した。
4. 昨日の運動會は、たいそうおもしろかった。
5. 天照大神は、三種の神器を皇孫瓊瓊杵尊にお授けなされた。

主語の修飾語 主 部
 客語の修飾語 客 部
 補足語の修飾語 補足部
 説明語の修飾語 説明部
 叙述部

第二章 成分の排列

文の成分の排列には、ほぼ一定の順序がある。次の例を見よ。

成分の排列

風^主が、吹^説く。

秀吉^主が、關白^補とな^説つた。

風^主が、花^客を散^説らした。

校長^主が、優等生^補に、賞品^客を與^説へた。

校長^主が、賞品^客を、優等生^補に與^説へた。

風^主が、はげしう吹^説く。

東郷大將^主は、東洋^補のネルソン^補とあ^説がめ

られ^主て居^説る。

我^主が、海軍^主は、大い^説に露國^客の艦隊^客を

成分の排列の一般順序

即ち

破つた。

- 一、主語は首位にある。
- 二、説明語は末位にある。
- 三、客語は、主語と説明語の中間にある。
- 四、補足語は、客語のない文では、主語と説明語の中間にある。客語のある文では、客語の上か下かにある。
- 五、修飾語は、修飾される語の上に添はる。但し、補足語又は客語のある文では、多く主語のすぐ下に、説明語の修飾語が添はる。

右は、成分排列の一般順序であるが、時として、語調をととのへたり、語勢を強めたりするため、わざとその位置を

成分の顛倒

顛倒させることがある。次の例を見よ。

うまいなあ、君の演説は。

ねるとしよう、もう十時になったから。

困るなあ、毎日天氣がわるくて。

忘れてはならぬぞ、父の遺訓を、くれぐれも。

いきますよ、きつと、雨が降つても。

どこへ、今の鳥は飛んでいったらうか。

第三章 成分の省略

文は、前後の關係や從來の慣用によつてその意味の言外に推知される時に限り、その成分を略することがある。次の例を見よ。

成分の省略

（私）^主は 明日 君 を お尋ね しませう。

（あなた）^主は いつ 御出立 になり ますか。

私は、少しも（その事）^客を 存じ ませんて

した。

僕は、言海 を 買った。君 も（言海）^客を

買ったらうね。

校長 が、卒業證書 を（卒業生）^補に 授與 され

た。

夜 が 明け ました。さあ、早く（床）^補から

お起き なさい。

千里 の 道 も 一歩 から。（はじめ）^説

「君はいつ上京しましたか。」「僕は

昨日。（上京）^説しました」

右はいづれも、主語、客語、補足語又は説明語を略いた例である。この外文には同時に二個以上の成分を略くこともある。次の二つの例を見よ。

〔主人〕^主〔ここに〕^補馬を つなぐ な。

〔君は〕^主いつ 學校を 退學した か 〔僕は〕^主昨

日。〔學校を〕^客〔退學した〕^説

練習

次の文の成分の位置や省略などについて説明せよ。

1. 正直の頭に神宿る。
2. 昔は昔、今は今。
3. よくお出でてした。さあさあ、こちらへ。
4. 「いつも失禮ばかり。」いや、私こそ。」
5. 思ひもよらぬこととした。今日お出でて下さらうとは、
6. 「なぜ缺席しましたか。」頭痛のために。」
7. 明治二十三年十月三十日に、明治天皇は教育勅語を下し賜はつた。

第四章 節句

風も 吹き、雨も 降る。

徳の 高い 人は、尊敬される。

右の風も吹き、雨も降る、徳の高いは、何れも文の主要成分たる主語、説明語などを備へて居るけれども、文の一部分を形造つて居るに過ぎぬ。かやうに、文に必要な成分を備へながら、なほ文の一部分たるに過ぎぬものを節といふ。

節は其の性質上より次の五つに大別する。

第一節 獨立節 此同位節、對立節、上句下句

前例の風も吹きと雨も降るとは、いづれも對等の價值を備へて居て、互に他の節に従屬して居ない。かやうな節

獨立節

を各獨立節といふ。

兄は本を讀み、弟は字を書く。
の兄は本を讀みと弟は字を書くとの如きも、亦各獨立節である。

第二節 名詞節

諺に、「時は金だ」といつてある。
弟から、「叔父が死んだ」と知らせ
て來た。

右の時は金だ、叔父が死んだは、いづれも體言のやうに用ひられて居る。かやうな節を名詞節といふ。

名詞節

第三節 形容節

徳の高い人は、尊敬される。

形容節

私は終日雪の降る野邊をさまよひました。
雁は花の咲く春を見すてて歸りました。
右の徳の高いは名詞人を形容し、雪の降るは名詞野邊を形容し、花の咲くは名詞春を形容してゐる。かやうな節を形容節といふ。

第四節 副詞節

雨が止んだら、散歩しよう。
容貌は醜いけれども、心は美しい。

右の雨が止んだら、容貌は醜いけれどもは、いづれも他の動詞、形容詞などを限定して、副詞の用をつとめて居る。

副詞節

かやうな節を副詞節といふ。

第五節 説明語節

仁者^主は、命^主が^説長い。

太郎^主は、晝^主が^説上手^説だ。

説明語節

右の命が長い、晝が上手だは、何れも説明語の用をつとめて居る。かやうな節を説明語節といふ。

附屬節

(注意)この場合には、仁者は、太郎はを、又總主ともいふ。第五、文主より、名詞節、形容節、副詞節、説明語節を、獨立節に對して附屬節と總稱する。

練習

次の文の中の節を指摘し、且つこれを分類せよ。

- 1. 塵も積もれば山となる。
- 2. 花は咲き、鳥は啼く。

- 3. 日本人は、愛國心が強い。
- 4. 己れの欲せぬことを、他人に仕向けてはならぬ。
- 5. 古人も、正直の頭に神宿るといって居る。
- 6. 日の暮れぬうちに、宿に著きたいものだ。
- 7. 大水が出れば、堤がくづれ、大風が吹けば、家がたふれる。

第五章 文の種類

文は、その構造上又は性質上より通例左の數種に分つ。

(甲)構造上の種類

第一節 單文

日^主が^主暮れ^説た。

子供^主が^主本^客を^説讀ん^説て居る。

母^主が^主子供^補に^客柿^客を^説やつ^説た。

右の文は、一箇の主語、客語、補足語、説明語を備へて居るば

單文

かりて、節を含んで居ない。かやうな文を單文といふ。

(注意) 雨も、風も、やんだ。

私は筆と、墨と、紙とを買った。

彼れの學識は、甲にも、乙にも、丙にも劣って居る。

あの男は、高く、清く、正しい心をもつて居る。

右は何れも、二個以上の主語、客語、補足語、又は修飾語を備へて居る。けれども、節を含んで居ない。故に又單文である。

○日本人は、忠義心が深い^{説明語節}のやうに説明語節を備へて居る文章は、通常單文の中に加へる。

第二節 複文

諺にも「善は急げ」といふては

ないか。

風の吹く日は、さわがしい。

呼掛語
独立語トス

複文

雨^{副詞節}が やん だら、遠足に 出かけ よう。
右の文は名詞節、形容節若しくは副詞節を含んで居る。
かやうな文を複文といふ。

第三節 重文

鳥^{獨立節}は 歌ひ、蝶^{獨立節}は 舞ふ、

弟^{獨立節}は 兄^{獨立節}を 敬ひ、兄^{獨立節}は 弟^{獨立節}を 愛する。

重文

右はいづれも獨立節から成りたつて居る。かやうな文を重文といふ。
文は以上三種に外ならぬけれども、中には随分込み入つたものもある。今その一例を次に述べよう。

山^{副詞節}は 高い^{副詞節} けれども、限り^{副詞節}が あり、

複文

海は深いけれども、底がある。

右は複文二個より成り立ってゐる重文である。

副詞節

重文

獨立節

雨も止み、風も静まつて、おだやかな空模様となつた。

右は重文を含んでゐる複文である。

次の文を分類し、且つその中に含んでゐる節を説明せよ。

練習

1. 吉野山は花によく、龍田川は紅葉によい。
2. 太郎の進軍喇叭を吹く聲が、かすかに聞えた。
3. 虎は死んで皮を残し、人は死んで名を残す。
4. 角力はたびたび見たけれども、芝居は一度も見たことがない。
5. 行の正しい人は尊敬されるし、行の正しくない人は擯斥される。

(乙)性質上の種類

第一節 敘述文

櫻は花の王^だです。(肯定)

昨日は風が吹いた。(肯定)

彼は君子ではない。(否定)

友達はまだ来^ぬない。(否定)

明日は多分風が吹かう。(推量)

風が吹いたら、波が立つ^{だらう}。(推量)

風は吹かうが、雨は降るまい。(推量否定)

右は思想を有りのまゝに敘述する文である。かやうな文を敘述文といふ。

敘述文

第二節 疑問文

これはどなたの本ですか。

疑問文

雨はもう止みましたか。
右は何れも疑問を表はす文である。かやうな文を疑問文といふ。

(注意)○疑問文は多く下にかの助詞を添へる。但し、上に何處誰何などの疑の語があると、かを省くことが出来る。次の例を見よ。

あなたは何處へいらっしゃいます。

そこにゐるのは誰だ。

これは何の木です。

この鉛筆はいくらです。

○反語の文は、形は疑問でも、意味は肯定であるから、反語文といふ一類を立てて獨立させるのが至當であるけれども、通常、その形の上から之を疑問文の中に加へる。次の諸例を見よ。

雨が降るものですか。(降りません)

どうして忘れよう。(忘れん)

反語

何てそんな事がありませう。(ありません)

第三節 命令文

學問を勉強せよ。

下女に庭をお掃かせなさい。

こゝに塵を棄てるな。

金錢を浪費してはなりません。

命令文

右は何れも「かくせよ」、「かくしてはならん」と命令し又は禁止する意を表はす文である。かやうな文を命令文といふ。

第四節 感歎文

ああ、かはゆや。

まあ、こまつた事ですな。

感歎文

右は何れも、感歎の意を表はす文である。かやうな文を感歎文といふ。

(注意) 〇感歎文には、前のあ、ま、あ、や、ね等の如き感動詞の外、お、や、あら、よなどの感動詞を含むのが常である。

〇「どれ話さう、さあ行きなさい」の「どれ、さあ」のやうに、單に發語の意を示す感動詞を含んでゐる文は、普通の敘述文又は命令文で、感歎文ではない。

文は性質上から、かやうに四種に分類することが出来るが、實際には、一文の中に二種以上の文が交りあつて、込み入つてゐる場合が多い。
次の文をその性質上から分類せよ。

練習

1. いや、退却はせぬ。今日は皇太子殿下の御誕生日だ。このおめでたい日に、折角占領した陣地が棄てられるか。帝國陸軍の名譽のため

だ。あくまでも退却はせぬ。

2. 第一大隊より前進。これぞ進軍に臨んで聯隊長が部下に下した最初の號令であつた。我等は既に征露の途に上つたのである。あゝ、何といふ愉快な事であらう。

3. 免す、免す。もう殺すに及ばぬ。嗚呼、あつばれの勇士だ。歸れ歸れ。敵ながらも、お前のやうな勇士は殺すに忍びない。

訂改 日本語法提要終

大正	明治	明治	明治	明治	明治	明治
十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四
年	年	年	年	年	年	年
十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月
廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日
月	月	月	月	月	月	月
廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日
日	日	日	日	日	日	日
廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日
月	月	月	月	月	月	月
廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日
日	日	日	日	日	日	日
廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日
月	月	月	月	月	月	月
廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日
日	日	日	日	日	日	日
廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日	廿五日

訂改 日本語法提要
定價金參拾錢

著者 小山左文二

發行者兼 松邑孫吉

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六、七番地
株式會社 秀英舍



發行所

東京市京橋區南鍛冶町
振替口座七九三四番

松邑三松堂

